# 芝っ子

終の住処を守る会 編

# 芝っ子

終の住処を守る会 編

# 目次

０１　発刊によせて

０２　はじめに　・・・・　1

０３　北四国町周辺の歴史　・・・・　3
四国町界隈のこと
北四国町とその周辺（１）（２）
関東大震災/東京大空襲/年表/有馬ヶ原と薩摩ッ原/
北四国町界隈の名所旧跡
みどころMAP

０４　北四国町周辺の道と歴史　・・・・　23
三田通り（１）（２）
三田通の思い出
横丁（１）（２）

０５　地域の移り変わり　・・・・　31
妙法寺
地域と学校のつながり
芝小学校と赤羽小学校
草野球少年団
昭和初期の遊び
春日神社
慶応義塾大学三田キャンパス（１）（２）
東京都済生会中央病院
株式会社日本電気（ＮＥＣ）（１）（２）
住宅地図での変遷（１）（２）
北四国町の昔と今の風景

０６　終の住処・北四国町　・・・・　59
北四国町会
芝寿会
まちの顔とまちの声と（１）（２）（３）
懐かしい風景
商店・企業名簿
商店・企業マップ
終の住処を守る会／活動内容

０７　終わりに　・・・・　74

# 01：発刊によせて

記念誌「芝っ子」の発刊誠におめでとうございます。

芝をはじめ、港区内の各地域には、長い時間、歴史の中ではぐくまれてきた文化や伝統が息づいています。

まちの歴史、町名の由来やゆかりのある人物、地域の言い伝え、まちのシンボルなど、自分たちのまちの歴史を知ることは、大変大事なことで、自分の住んでいるまちの歴史に誇りを感じ、愛着を覚えることから、郷土愛が生まれるものと考えます。

皆さんが発行されました、「芝っ子」が地域の歴史を知るうえで、そして後世に伝える貴重な資料となりますことを期待いたします。

「芝っ子」の発行に携わった皆さんの熱意と努力に敬意を表しまして、お祝いの言葉といたします。

港　区　長

武　井　雅　昭

# 02:はじめに

今、私達の住んでいる町、その周辺の古い歴史を本にして
子供達に残すことが私達の義務だと思っています。

終の住処を守る会　代表世話人
（S58～H15　芝寿会会長）

野崎　秀夫

江戸っ子、浪花っ子、道産子。この言葉の響きの裏には言葉では言い表す事の出来ないその土地への思いと愛情が込められています。この独特の言葉は、「先人達がいろいろ経験し築き上げて来た無形の物を伝承してゆく、その地を誇りに思い無限の愛着を持って自慢する」という一つの文化であると考えます。

江戸っ子はと言うと『義理と人情とやせ我慢』。江戸っ子気質を端的に言い表すこの表現は鮮明にその土地柄と其処で生きる人々の姿を浮かび上がらせています。では、その、江戸っ子の『生粋』はと云うと『芝で生まれ、神田で育ち、今じゃ火消しの纏い持ち』。こう詠われる、その『芝』に我々は現在住んでいるのです。土地に住み着きその地で生きることは人となりを作り上げてゆくものだと考えます。その無形の物を与えてくれる土地『芝』を私達は命がけで愛してこそ、『俺達は芝っ子だ』と胸を張って啖呵が切れるのです。

戦後も60年、昔から伝えられたよき伝統習慣が徐々に忘れ去られて行くように感じます。今に於いて、我々の手で少しでもこの地の歴史を記録に留めて芝を築いて来た先人達の息吹を後世に伝え、『俺達は江戸っ子なんだ、芝っ子なんだ』と胸を張って自慢する、誇りとしての気概を子供達に残してゆく資材として、この冊子が少しでもお役に立てれば幸いと存じます。

終の住処を守る会・相談役　中川　敏雄

H19総会において、終の住処を守る会設立メンバーの1人である中川氏の後任として承認されました。私自身、昔日の北四国町野球チームGallants(ギャランズ)のピッチャーとして活躍しましたが、町の歴史が消えてゆく現在、この本が子供達に今に残る芝の歴史を伝える手懸りと成ることを期待して止みません。

終の住処を守る会・代表世話人　村山　勝美

# 03：北四国町周辺の歴史

## 四国町界隈のこと

戸板学園　理事長　小野　一成

三田四国町という町名が正式に公のものとなったのは、明治５年（1872）のことである。しかしこの土地はそれよりずっと前、江戸時代半ばの18世紀頃から一般に四国町と呼ばれていたようだ。このあたりはほとんどが大名屋敷で、あとは数軒の寺院と少しばかりの町家がひしめいているところだが、一時期阿波の徳島、土佐の高知、讃岐の高松、伊予の松山という四国四藩の屋敷が隣り合っていたことからついた名だといわれている。大名屋敷はいろいろな事情で持ち主がかわることがあり、江戸の末頃には四国町の半分は薩摩藩の屋敷となっていた。薩摩屋敷の東西は現在の三田通りから芝大明神の参道までまたがっていた。今でもその北側の道をたどることができるが、いいかげんくたびれる。

四国町はほぼ正方形である。どんなに広く、また昔の大名屋敷がどんなに大きかったか判るというものだ。

江戸という街は徳川氏の城下町が基本なので、武士が昔から威張っていた。19世紀はじめ、文化・文政ごろの江戸の人口は百万人といわれたが、その構成は旗本・御家人といった徳川直接の家臣と、各大名が参勤交代で国許から引き連れてきた家来が合わせて四十五万、神宮や僧侶が五万、そして町人が五十万となっていた。ところが住んでいる場所を見ると、武士の住む武家地（ここは町奉公の支配力の及ばぬ治外法権）が実に、70％、寺社の土地が15％、そして人口の半分を占める町人は僅か15％の町家に押し込められている。後の話になるが明治維新で大名屋敷が取払いとなり、民間に払下げられるとたちまち町家が進出してきた理由の一つはこの狭い住居にあるのかもしれない。

もっとも、大名屋敷といっても、必ずしもそこに殿様がいたわけではない。徳川幕府は人質政策で、大名とその家族を江戸城のまわりに住まわせ、藩の事務も処理させた。これが「上屋敷」である。ところが江戸城のまわりの土地は限りがあるので、いきおい広さも限られてくる。そこで大名達はその少し外側に広い別宅を構え、御隠居様とか、先代の殿様の奥方とか、今の殿様の弟妹といった人たちや参勤交代で江戸へ出て来て一年間江戸暮しを強いられる家来たちの官舎などにあてた。これが「中屋敷」である。さらに江戸の名物といわれた大火事で焼け出された場合の避難所となる「下屋敷」を郊外（当時の）に設けた。工面の良い大名は古典風雅な庭園を作り、優雅な別荘生活を楽しんだものである。

ほとんどの大名は中屋敷、下屋敷を二・三箇所ずつ持っていたから、幕末ごろの切り絵図の、今の地図にあたる位置を見ると四国町周辺は中屋敷、下屋敷が多く入り乱れている。上屋敷もまじっている。最多は江戸城周辺に厳重にあつめられていた上屋敷も、江戸中期以降になると規制も緩み、市中に分

散しはじめた。上屋敷、中屋敷の区別も便宜上になってきて、例えば四国町の薩摩屋敷は天保14年（1843）は上、安政3年（1856）は中、文久元年（1861）にはまた上屋敷と度々用途が変えられている。
屋敷が広く、そこに暮らす人間が若くて元気な男ばかりだったらなにかにつけて大事である。「品川の客人偏（にんべん）の有ると無し」と川柳でからかわれたのは、薩摩屋敷の若侍である。品川は有名な遊び場所、人偏云々は寺の字の事、つまり薩摩、侍と増上寺の僧ということだ。
四国町の薩摩屋敷は、幕末西郷隆盛によって徹底的に利用された。当時の西郷は大変な謀略家で、徳川幕府を倒すために不良浪人を多数集めて窃盗団を組織させ、「天朝の御用」と称して江戸市中の商家を片端から襲って治安を極度に悪化させた。町奉公の配下が追い掛けても、この薩摩屋敷に逃げ込んでしまう。するとここは大使館のような治外法権なので町方は手をつけることができない。手続きを踏んで掛け合っても、まともに取り合おうともせずはねつけた。この対立が爆発したのが慶応3年（1867）12月25日である。当時町奉公と共同して江戸市中の治安維持に当たっていた出羽庄内藩の藩兵が屋敷の対応に腹を立て、焼き打ちしてしまったのである。屋敷の人間は逃げ出したので死者は少なかったが、この知らせはすぐに京へ飛んで翌4年1月3日の鳥羽伏見の戦いとなり、戊辰戦争のきっかけをつくったのである。
明治維新になると、江戸に集められていた大名達は、維持に金のかかる江戸屋敷を新政府に引き渡し、国元に帰るものが続出した。人口も三分の一になり、市中は至る所に空地ができた。四国町も薩摩っぱらと呼ぶ大きな焼跡の空地を抱えることとなった。明治5年に三田四国町、新堀町といった大町割が定められたあと、薩摩屋敷のあとには何本も道がついて民間に払い下げられ、町家として発展するようになる。増上寺の三門前、境内地を横切って南北に通された道は、明治22年（1889）になると四国町の真中を抜けてまっすぐに東海道とつながり、大変便利になった。現在の日比谷通りである。36年にはそこに市内電車も開通した。
真っ平で道もまっすぐ、しかも新開の町家だけに比較的大きな敷地を要する施設が建てやすかったのであろう。明治30年（1902）1月発行の「東京名所図会、芝区」（「風俗画報」増刊）には、四国町内に10軒の工場と7つの学校があると書かれている。やはりこの年、芝公園紅葉館の隣に開設した戸板裁縫学校が四国町に移ってくるのは、明治37年（1904）八月のことである。

1902　戸板関子により戸板裁縫学校設立
1916　高等師範科三田高等女学校設立
1937　戸板高等女学校と改称

32P-⑪学校法人　戸板学園　港区芝2-21-17
学長　江澤　郁子

# 北四国町とその周辺（１）

この周辺には、かなり昔から人が住んでいた様です。そのことは「伊皿子貝塚」や「丸山古墳」などからも分かります。

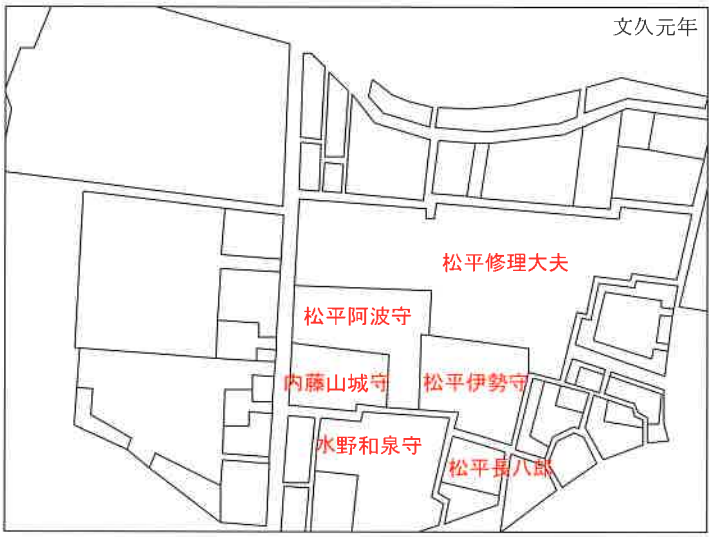
江戸時代より前（徳川家康が江戸に来る前）は、目黒郡大字三田村という大きな村の一部でした。「三田」という地名は、はじめ、「美田」とも「御田」とも言われており、美しい水田地帯であった事や尊い方のための米をつくっていた地であったことがわかります。明治の頃まで「三田小学校」は「御田小学校」でした。しかし、この頃はまだ慶応の山のふもとまでが海でしたので、もちろん四国町の土地は海でした。

その後の大規模な埋め立てにより、この地も埋め立て地としてつくられました。増上寺ができる前には陸奥街道という街道が通っていました。陸奥街道は、江戸と東北地方を結んでいました。この道を使って徳川家康は江戸に入って来たそうです。

江戸時代には大名屋敷が立ち並び、慶應大学の敷地は島原藩のお屋敷であったし、赤羽小学校の敷地は有馬屋敷でした。四国町の部分は、「水野大監物」「内藤丹波守」「松平長八郎」「松平一岐守」「薩摩宰相殿」の屋敷がありました。「四国町」という名前の由来は、四国の藩のお屋敷があったからではないか、という説が言われています。

また、島原藩は大変裕福な藩であり、今の慶應大学の図書館の位置に「月波楼」という月を見る為の場所も持っていました。そして、春日神社には四国の大名からいただいたという大変珍しい一枚岩の石段が今も変わらず使われています。有馬屋敷は、赤羽橋の方に赤い大きな門があり、その前には幅が2mもあるような広いドブが流れていました。庭の中には古川に注ぐ大きな池があり、まわりには柳の木がたくさん植えられていました。また、お屋敷の中には水天宮や火の見櫓がありました。この火の見櫓は、江戸時代には「高いのは有馬の火の見櫓」と言われ、名高いものでした。

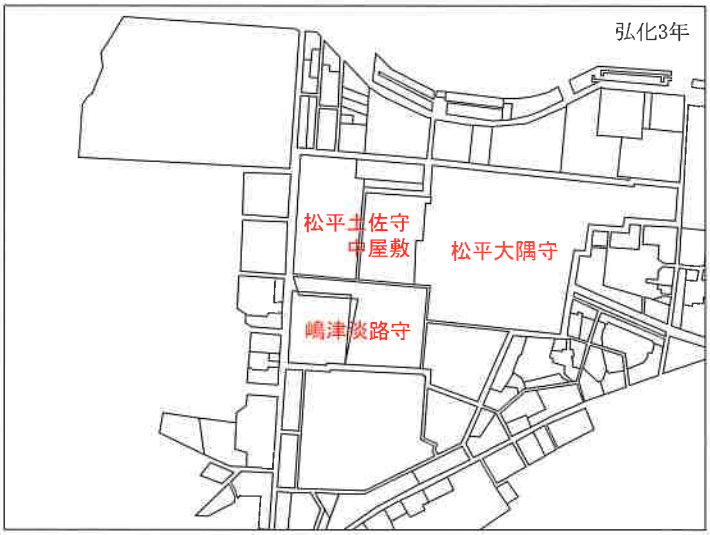
古川は美しく、川の両側には、河岸と物揚場があったそうです。



有馬の火の見櫓

明治に年号が移り変わると、江戸藩邸にいた武士達はお屋敷を出て国元に帰っていきました。屋敷はいらなくなったのです。そして屋敷だった場所は工場や空地になりました。
特に、丸に十の字を家紋とする薩摩屋敷の跡は　「薩摩原＝サツマッパラ」とよばれ、市電の、最初まだ「三田」と改名する以前は「薩摩原停留所」という駅名でした。有馬屋敷の跡は「有馬が原」と呼ばれ、「有馬が原」にある池には、釣り糸をたれる人がたくさんいた様です。
　また、この薩摩屋敷跡には「江戸開城、西郷南州・勝海舟会見之地」という碑がたっているように、慶応４年、官軍側の西郷隆盛と幕府代表の勝海舟が会見をし、江戸城の無血開城を取り決めた場所でした。

　その後、武家屋敷だった土地は明治政府に没収されました。これが、「上地」です。多くの上地された土地は、新しい政府の施設としてや、官舎として使われました。しかし、それでもまだ、江戸全体を使わなければいけない程の施設もなかったので、そこら中が「薩摩原」のようなものだったそうです。
そこで、明治政府は　明治２年（1869）「桑茶令」というものを出します。この「桑茶令」というのは、簡単にいってしまえば〈空地となってしまった武士や大名の屋敷を桑畑や茶畑にしてしまおう〉というものなのです。これは、野原になっている武家屋敷を利用するとともに、換金作物を耕作しようという目論見でした。この規則の中には「桑茶を植えたいものは申し出れば入札で払い下げを行う、土地を借りたいものは地代を払えばよい。」といったものも含まれていました。
　これを受けて藩邸を合併し「三田四国町」となります。しかし、1番から33番地までの中で２番地だけがやたらと大きく、四国町の全体の３分の２の広さでした。

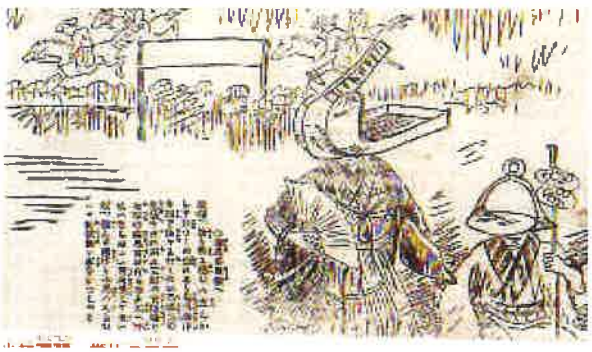


当時の武家屋敷の壁

# 北四国町とその周辺（２）

明治７年（1874）にこの三田四国町に「育種場」をつくろうという話がでます。これは、内藤新宿に設けられた内務省勧業寮の試験場の地質が適していないから新しい試験場をつくってはどうかという提案でした。そして、政府が「東京府下平民」から土地を買い取りました。明治10年（1877）には「三田歓農局育種場」ができます。この育種場と言うのは、穀物や野菜、果物、木などを育てて研究していました。また、馬も育てていたので育種場ができたこの年、お祝で、大久保利通内務卿の肝いりで競馬が行われました（和式競馬）。これが「東京における競馬のはじまりである」といわれています。その後も競馬は続けられ、明治12年（1879）には１周1200mの正式な馬場が完成し、洋式競馬を開催します。また、明治13年（1880）には興農競馬会社が設立され、春・秋２回の定期的な洋式競馬が開催されました。敷地南側には農具製作所ができ、農業で使う為の農機具制作が行われました。その後育種場は、大日本農会という団体に委託されました。そして西北の土地を政府が買い、獣医学校をつくりました。競馬場の方は、なにぶん小規模のものであったため、収支償わないまま姿を消しました。しかしこの三田育種場の名前は「種物横丁」という通りの名前でつい最近まで残っていました。

その後は、この土地を郷純造という男爵が買い取ります。地図で見ると町の中に少しずつ道ができて、人が住みはじめたのだろうなと想像できます。また、慶應の学生さんには美味しいお店しか流行らなかったので、三田通りや四国町のなかのいろは横町や種物横町には美味しいお店がたくさんあった様です。



明治初期の競馬場

また、明治36年（1903）三田通りに東京ではじめての路面電車がはしります。この頃の三田通りというのは銀座よりも栄えていました。三田通りでは慶応の学生達が市電から学校の前に上手に飛び下りる姿が見られたといいます。子供達も、煙草の箱でつくったメンコを強くする為に線路の上に並べて運転手さんにお願いし、電車で通ってつぶしてもらっていたと言います。

この頃、古川の河岸には木材・石材・竹材・米塩・薪炭商などのお店がぎっしりと並んでいました。古川に船を浮かべて運搬に利用していたことがわかります。

大正の頃、朝早く都電にのると乗車賃が安くなるというので朝六時半頃から駅で待つ人がいたようです。その他には青バスといって、女性が車掌さんをしているバスがありました。馬車や荷車も通っていました。

昭和のはじめには、縁日が行われて子供達は大変楽しみにしていました。

三田四国町は、職人が多く住んでいて、表具や洋服・帽子などを作っていました。タンス屋などは神田の職人が移り住んだといわれています。洋服・帽子などは慶応大学の学生のためでした。学生のための下宿もたくさんありました。

古川のあたりには材木屋や川砂利屋がたくさんあり、青物横丁もありました。当時は、古川を荷物を載せた船が往来していました。

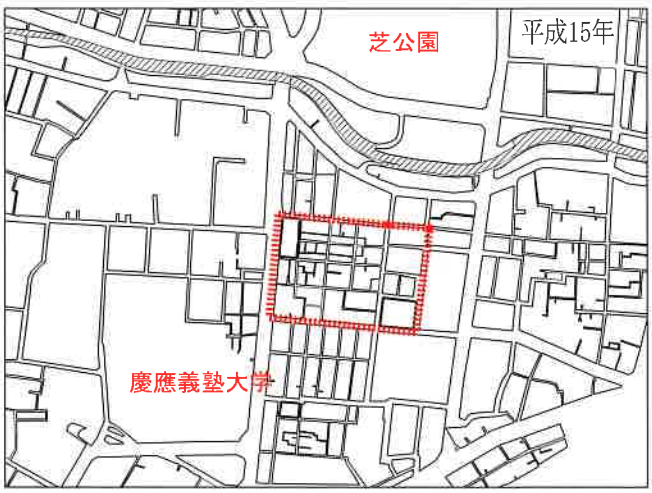
太平洋戦争中には、兵隊が赤羽小学校や慶應大学に暮らしていたため爆弾が打ち込まれることもありましたが、赤羽小学校の校舎は焼けることなく残りました。しかし、慶應の図書館の塔には爆弾が落ちた事もありました。

戦争が終わると、赤羽小学校を統合大学にしようとする動きが起こりました。慶応大学や第六高等女学校（現在の三田高校）もあるのでこのあたり一帯を文教地区にしようという計画だったのです。しかし、卒業生の反対と渋沢敬三さんという方の説得があり免れました。

この頃には、晴れた日には高台から国会議事堂を見ることができました。

また、建物がなかったため、富士山や芝浦の海も見えました。

近年では、ビルの高層化が進みました。また、三田通りの拡幅により通り沿いの商店は姿を消してしまいました。（野田亜希子　執筆）



# 関東大震災

大正12年（1223）9月1日午前11時58分、源を伊豆大島付近の海中に発した地震は、東京湾、相模湾沿岸一帯の地方をゆりつぶして、関東大地震が、関東地方南部を襲った。その規模はマグニチュード7.9、震源は相模湾西北部と計測された。

その日、東京地方は午前3時頃、やや激しい風雨を催したが、夜が明けてみるとカラリと晴れて、さわやかな初秋の朝日を見せた。人々がホッと息をついた昼頃、どこでも午餐の支度を整え、あるいは食卓についている時分、不意にどこからともなく、ズッシ～ンという異様な音響が起こったかと思うと、たちまち大地が波うちはじめて、振動は次第に激しく、やがて一大震動とともに、壁が崩れ、屋根が落ち、塀が倒れ、柱が折れ、家という家はことごとく大破し、あるいは倒れ、あるいは潰れた。土煙が八方から上がったと見ると、早くもその中から紅蓮の舌がよろよろと上がり始めた。2度目の強震がきたときは、ほとんど屋内にいる者はなかった。市内で収容された死体7万4024人のうち、男女の判明する者は男1万5628人、女1万6102人で、あとの3万9294人は男女の別さえ分からぬ死体だった。いかに酸鼻を極めたかは、この一事でも想像される。こうした状況下で市中には「朝鮮人が一斉に蜂起して、町に火を放ち井戸に毒を投げ、日本を乗っ取ろうとしている」といったデマが広まった。そして自警団が組織され、多くの人が虐殺された。

結局、こうした人災も含め、10数万人が死亡するという大惨事となった。（東京で観測した最大振幅14～20ｃｍ。地震後火災が発生し被害を大きくした。全体で死･不明14万2千余、家屋全半壊25万4千余、焼失44万7千余。山崩れ･崖崩れが発生。房総方面･神奈川南部は隆起し、東京付近以差西･神奈川北方は沈下した。相模湾の海底は小田原－布良線以北は隆起、南は沈下。関東沿岸に津波が来襲し、波高は熱海で12m、相浜で9.3m）

１回目の揺れが収まった時、日本電気の新ビル（２～３階建）が倒壊し、死傷者が多数出たので、逸早く近所の四国町住人が救助にあたった。この辺りは幸いにも火事はなく、平屋の長屋が多かったので家屋も倒壊を免れた。が、松本町辺りではお神楽にしていた家は二階がずれたり、潰れたりしたのが有った。三田通りに面している商店も潰れはしなかったが、屋根瓦は全部飛び、様相が変わって見えた。三田通りには本所方面から非難する人が数珠繋ぎに行列を作り、通りを渡れないほどであった。北四国町は被害が比較的少なかった所為もあって、人々は割合に穏やかで、朝鮮人騒ぎが起こっても殺気立つ事はなかったが、各町内に幾つか、１～２ヶ所検問所と称する物が設けられた。（その時の１つが中川理髪店の所に設けられた。）また当時、各町内に井戸が沢山（17・27・28・31番地等、町内に5～6ヶ所）あり、とても助かった。

**『以下は昭和43年（1968）11月1日（火）発行サニークレスト三田管理組合ニュースより故永島清太郎氏（栃木屋さん）の記事を掲載させて頂きました。』**

大正12年9月1日。その日は朝から良いお天気で風もなく、空が遠くのほうまで赤味がかっていて、重苦しいような不思議な空模様でした。お昼近く、私はちょうど自転車で田町9丁目のお得意先まで配達に行って、その店先で荷物を降ろそうとしていた時です。急に「ゴーッ」と唸る様な地鳴りがしてきたかと思うと、ものすごい横揺れで、自転車は倒れ、家々の屋根から瓦がずれ落ち、辺り一面酷い砂埃になりました。急いで自転車に飛び乗って引き返しましたが、途中、田町の八幡様付近のブロック塀が倒れて紺がすりを着た男の子が下敷きになっているのや、大勢の怪我人を見ましたが、どうすることも出来ず、やっと家に辿り着きました。

当時、三田通りには市電が通っていましたが、地震の為に電柱が倒れ、架線が所々垂れ下がっていました。幸い、家の者もご近所の方も無事で、皆、どうして良いか判らないと言う風で待機していました。本所・深川など下町では、火事で沢山の人が亡くなりましたが、アレだけの地震にもかかわらず、この三田通りでは１軒も火を出さなかったのは大したものだったと思います。又、三田通りの商家は殆どが本建築のしっかりした建物と見え、多少ゆがんだ位で倒れる家もありませんでした。焼けたのは金杉橋の向こう側で、これは埋立地の軟弱な地盤で、倒壊家屋が多く、家も密集していた為と思われます。

暫くすると「津波が来る」と言ううわさが聞こえてきました。四国町の方から大勢の人が手廻り品の入った風呂敷包みを持てるだけ持ってぞろぞろと坂の上に避難してきました。その人の流れに釣られるように、私共も一緒に有馬ヶ原へ逃げることにしました。何も無い草ボウボウの野原で暗闇の中蚊に刺されながら数時間過ごしましたが、夜中になってここも危険だからもっと高台の仙台坂上の仙台ヶ原（現、麻布グラウンド）へ行った方が良いということになりました。今ではテニスコート・野球場のある立派なグラウンドですが、やはり当時は高台にあるだけの草原で、不安な中で世の明けるのを待ちました。今でも忘れられないほど長い一夜でした。幸い、三田通りも大した被害はなくて無事な店が多く、私たちもすぐに商売を始められました。

芝

芝区鉄道高架線

芝区愛宕山より新橋を望む

# 東京大空襲

第二次世界大戦中アメリカ軍により行われた空襲のうち東京に対して行なわれた1945年（昭和20年）3月10日と5月25日を東京大空襲と呼ぶ。特に、3月10日未明のB-29爆撃機344機による爆撃は、40k㎡の円周上にナパーム製高性能焼夷弾を投下して東京の住民が逃げられないようにした後、深川方面の東京下町地区を中心にその円の内側を塗りつぶすように約100万発(2,000トン)もの油脂焼夷弾、黄燐焼夷弾やエレクトロン焼夷弾が投下された。これは一平方メートルに3発の焼夷弾が投下された計算となる。一晩のうちに広範囲の区域が焼け、20万人とも言われる人が焼死しました。しかし芝にはその日、空襲警報と共にしばらくすると例のごとく高射砲のドンドンパチパチという音、Ｂ29のブーンという空気を圧する編隊の音はしても、爆弾・焼夷弾が近くに落ちてはきませんでした。この港区が激しい爆撃に見舞われたのは5月25日の爆撃の時である。この北四国も今のＮＥＣ辺りから赤羽橋一帯が一望できるほど焼け尽くされてしまった。猿田幸作さんは「当時焼け野原には父親と自分の他、誰一人残っておらず、焼け残ったドラム缶に水を入れて沸かし、満天の星空を見上げながら風呂に入った」と話てくれました。４～５年してようやく昔住んでいた人達がボチボチ帰ってきたそうで、東京都の被害はおよそ10万人の死者をはじめ、負傷者は11万4千人、焼失家屋は約27万戸であり、40ｋｍ平方メートルが焦土と化し、これは東京都の3分の1が焼け野原となったことになる。

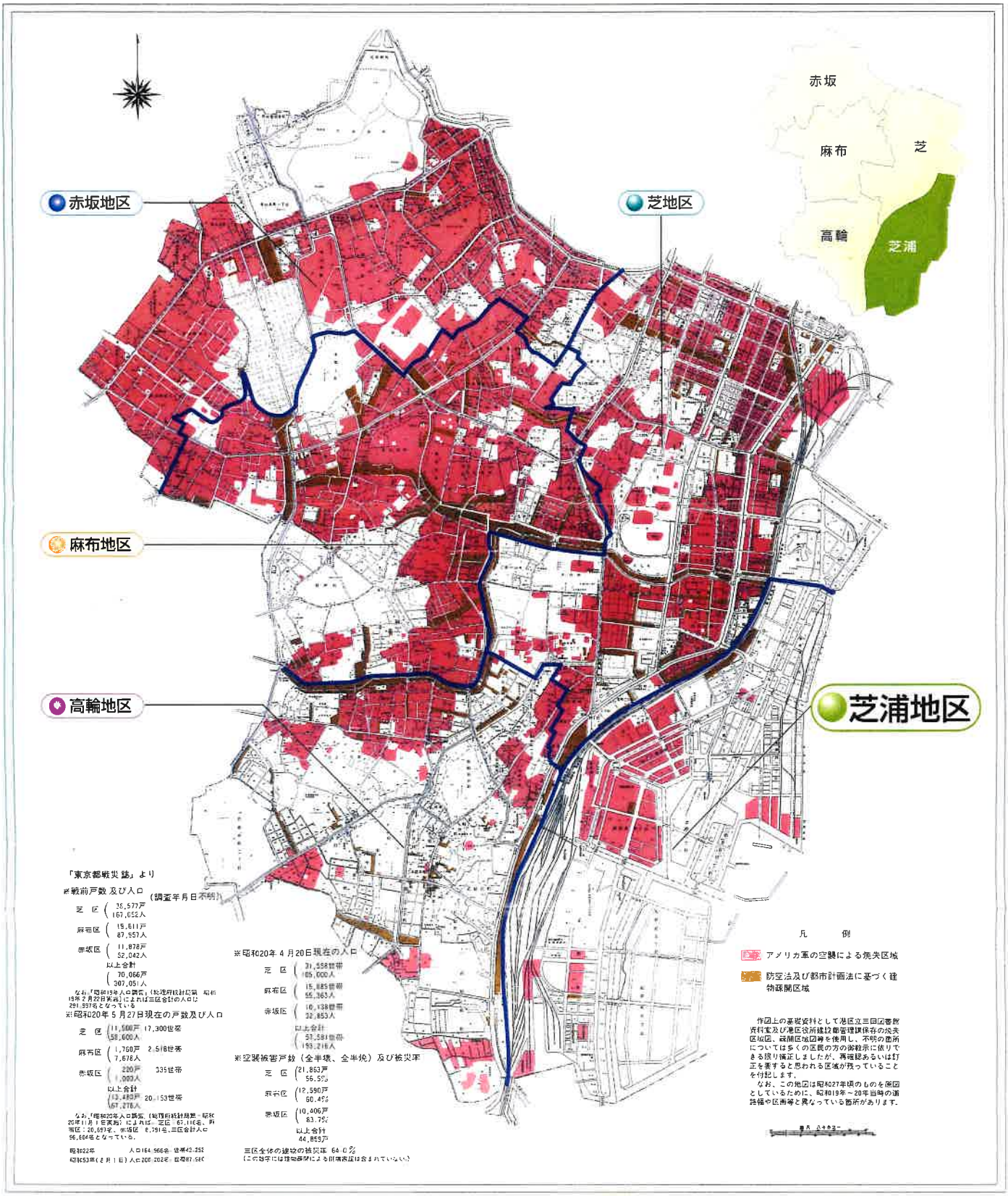
## 『以下は「赤羽小学校同窓会機関紙」から当時の様子が伺える青木慶子さんの寄原稿を掲載させて頂きました。』

《強制疎開のこと》私の家は今の港区（昔の芝区）三田通りで楽器店を営んでいました。慶応大学の直ぐ傍です。三田通りから日本電気方面に行く通りを２０mくらい広げて、防火帯にするということで、『その片側に在る家々は強制的に取り壊すから疎開しなさい』という役所の命令が出ました。30年も住んでいて関東大震災にも壊れなかった家ですが、壊す事に成り引っ越しする事に成りました。両親達は松本に行きましたが、私は学校工場に行くため親しいお隣に住まわして頂きました。《5月25日の事》5月23日に又東京に大空襲がありました。近所のイタリ―大使館の辺りまで焼けましたが、住いの近辺は残り「もう廻りがこんなに焼けてしまったのだから此処は大丈夫」と言われ安心していました。が、翌々日の25日夜、またまた大空襲です。23日よりも敵機の数は多いようで、低空に飛ぶサーチライトに照らされたＢ29は怖いものがないというように空を圧し、高射砲は其れより高い検討外れのところで炸裂しています。１ｋｍ先の芝公園に逃げる事にしました。真っ黒な闇の中で高射砲の炸裂した光とサーチライトの照る夜空は、爆音と破裂音がなければ美しいと言えたかも知れません。

芝公園は今の東京タワーのある所で、丘や沢山の樹木・池・大運動場・増上寺等が在る大きな公園です。丘の脇には横穴式防空壕がいくつか掘られていましたが、壕を覗くと大勢の人がいたので木立の多い丘に登って木の間で身を竦めました。焼夷弾がシャーと音を立てて横殴りの雨のように降ってくるのが良く見えます。芝園橋から御成門の道路は火の粉で埋め尽くされ、火が巻き起こす風で川のように流れて見えます。増上寺脇の２階建ての御霊屋（徳川家の霊廟）は屋根に焼夷弾が当たったかと思うと1階の軒先から火の舌がポッポと見え、ものの２，３分と経たない内に紅蓮の炎が舞い上がり、あっという間に建物全体がオレンジ色の火に包まれてしまいました。空襲も収まったのでいくらか明るくなってきた中を丘を下り、三田通りに出て見ました。赤羽橋からの通りは色のない世界でした。電信柱は垂れ下がった電線に引っ張られて斜めに倒れ黒こげ、あの見慣れた町並みは瓦礫の山と化し、灰色の煙とチラチラ見える残り火だけが僅かな色で、まるで白黒映画を見ているような惨状でした。慶応大学正門脇の三色屋（煙草屋さん）・藤波紙店などの側は焼けないで残ったようですが、こちら側は全部丸焼けでした。防火帯も何の役にも立ちません。府立第６高等女学校（今の三田高校）の校庭で罹災証明書と配給の乾パンを貰って叔母のいる麹町に向かいました。札の辻から飯田橋までの電車通り沿いの家は殆ど燃え尽きていますが、虎ノ門あたりの鉄筋の建物は外観は残っています。九段のお濠の渕には、火に追われた為でしょうか、土手から落ちた人々が黒いマネキン人形のようになって大勢死んでいました。叔母の家が焼けてしまっていたので世田谷の知人宅に向かいました。途中明治神宮の参道の大灯篭の脇は黒焦げになった死体の山でした。５月29日には横浜方面も大空襲で、其処にいても爆弾の音が聞こえ煙が良く見えました。

戦後、四国町の西部町会と呼ばれていた地区(17. 18. 19. 26. 27. 28. 29. 30. 41. 42. 43番地)と北部町会と呼ばれていた地区（20. 21. 22. 23. 24. 25. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40番地）と東部町会（一部和合村、今の北四国町会東地区）が一緒になり、今日の北四国町会となった。　この四国町会は、さしたる事件もなく平和な地域だが、昭和10年・島村クリーニング店（現在の上松ビル辺り）からの火事で29番地一帯が焼けてしまった事、昭和12～3年頃・原口ラジオ（現在長田商店辺り）からの火事で18番地一帯が焼けてしまった火事が、大きな事件である。近年では平成7年頃、金庫あらしが話題になり、最近になって老人を狙う「オレオレ詐偽」の話を耳にする位である。

# 港区 太平洋戦争中の空襲による焼失及び建物疎開区域図




写真提供：新修港区史付図　その2

# 北四国町周辺の年表

| 西暦 | 年号 | |
|---|---|---|
| 1851 | 嘉永３年 | 水野大監物、内藤丹波守、松平長八郎、松平一岐守、薩摩宰相殿の屋敷があったが「さつまっ原」となる。 |
| 1869 | 慶応４年 | 薩摩藩江戸藩邸焼き討ち事件。 |
| 1869 | 慶応４年４月 | 武士が屋敷を出て国元に帰る。武家屋敷は明治政府に没収される。 |
| 1869 | 明治２年８月 | 「桑茶令」 |
| 1870 | 明治３年４月 | 武家屋敷について。維新前から町人が金を払って手に入れた屋敷は使い続けてもよい。という条例がでる。 |
| 1872 | 明治５年 | 藩邸を合併して三田四国町とした。 |
| 1872 | 明治５年 | 三田四国町となる。１～３３番地までだが２番地だけが大きい。 |
| 1874 | 明治７年２月 | 「育種場」をつくろうという話しがでて、「東京府下平民」から政府が土地を買い取る。 |
| 1877 | 明治１０年９月 | 「歓農局育種場」できる。（農事試験場のようなもの） |
| 1877 | 明治１０年 | 薩摩藩の屋敷の跡地に三田勧業局育種場が建設されることになる。 |
| 1877 | 明治１０年 | 開設を祝うかたちで、大久保利通内務卿の肝いりで競馬が行われた。（和式競馬） |
| 1879 | 明治１２年 | １周1200mの正式な馬場が完成。洋式競馬を開催。（しかし和鞍を使用するものが多かった。） |
| 1880 | 明治１３年 | 興農競馬会社が設立され、春・秋２回の定期的な洋式競馬が開催。 |
| 1881 | | |
| 1882 | 明治１４年 | 明治天皇の行幸を仰いだ。 |
| 1883 | 明治１６年 | 欧化政策を進める政府高官が、よりによって和式競馬を楽しむのを皮肉った風刺画がでる。 |
| 1879 | 明治１２年 | 南側に農具製作所ができる。 |
| 1879 | 明治１２年 | その周囲を利用して木村荘平が競馬場を設けた。（日本初の競馬場） |
| 1884 | 明治１７年４月 | 育種場は、大日本農会という団体に委託される。 |
| 1885 | 明治１８年 | 西北の土地を政府が買う。（獣医学校） |
| 1886 | 明治１９年７月 | 東半分を買い、文部省と交換する。 |
| 1886 | 明治１９年 | 全体的返還、「民間ニ払イ下ゲ」<br>・育種場として残った土地のほとんどが郷純造の所有に。<br>・文部省と交換したと言う東半分の土地は三井家に。 |
| 1890 | 明治２３年 | なにぶん小規模のものであったため、収支償わないまま姿を消した。 |
| 1897 | 明治３０年８月 | 日本電気が三吉電気という会社の工場を買収。 |
| 1898 | 明治３１年３月 | 日本鉛管製造会社を三井物産から郷誠之助が引き受ける。 |
| 1898 | 明治３１年９月 | 日本電気設立（電話器、電話交換機の供給） |
| 1900 | 明治３３年９月 | 三井銀行から土地を入手し、その後４度にわたって土地を買う。（１、２回目三井銀行から、３、４回目西側を郷誠之助から。） |
| 1902 | 明治３５年 | 既に芝区に於いて工業地帯となった。 |
| 1903 | 明治３６年８月 | 三田に東京ではじめての路面電車がはしる。 |
| 1905 | 明治３８年 | 日本鉛管製造会社が郷誠之助の所有となり「日本鉛管製造所」となる。 |
| 1923 | 大正１２年９月 | 関東大震災（北四国町は殆ど被害無し） |
| 太平洋戦争開始 | | |
| 戦争中 | | 町内にほぼ士の字形の疎開空地を設けた。<br>三田車庫付近を除きほぼ全町被災。<br>（北四国町は全町被災、南四国町は無事）<br>あいかわらず工場は多い。（京浜重工業地帯の一部である） |
| 終戦 | | |
| 戦後 | | その景況は続いたが住宅の混在が減少し職・住の分離も進んだ。 |
| 近年 | | 主要道路に面してビル化も進行。 |

参照：東京市芝区役所発行　「芝區誌」
鈴木博之著　東京の［地霊］　文藝春秋

# 有馬ヶ原と薩摩ッ原

『有馬屋敷』

現在の三田1丁目の旧赤羽（国際医療福祉大学付属三田病院～東京都済生会中央病院～三田国際ビル～三田台郵便局）町一帯は、筑後久留米藩21万石有馬考五郎の上屋敷の跡地でした。猫三大話と言われた有馬のお家騒動の「猫騒動」は有名です。明治４年に有馬屋敷に工部省製作寮がつくられると、翌五年にここが赤羽町になった。工部省はまもなく海軍造兵廠と改まり、れんがづくりの工場が黒煙をあげていました。有馬屋敷の朱塗りの門が残っていて、裏門に使われていたそうです。大正のはじめ、造兵廠が取り壊され、大正４年現在の済生会病院がたてられました。しかし、赤羽町の大部分は有馬が原とよばれる広い空地になっていた。昭和42年、居住表示の実施により赤羽町は無くなり、三田1丁目になりました。

『有馬ヶ原』

三田国際ビルの裏から坂の上の保険局あたり一帯には、江戸時代に筑後(現在の福岡県)久留米藩有馬家の江戸屋敷がありました。ここは有馬ヶ原と呼ばれ、下から階段状に一の原・二の原・三の原と呼ばれていました。

〃一の原〃 の真ん中には古池があり、日照りのときでも涸れず、大雨でも溢れなかったそうです。ちょうど三田高校のグラウンド全体がこの池の位置になります。フナや鯉、鮠などが釣れたので、池の端には釣り道具屋まで出来、釣り好きが集まっていました。

〃二の原〃 は今の赤羽小学校の辺りになりますが、此処は草ボウボウで、男の子にとっては兵隊ごっこ,女の子はタンポポ・スミレの花摘みが出来、一日中遊べる所でした。

〃三の原〃 は今は保険局の有る所ですが、日清日露の戦時中は海軍の兵器工場があった場所で、屑鉄が沢山埋まっていて、値が高く売れたので何処からか大勢の商売人が集まってきてはあちこち掘り返していました。此処は山の上でしたので凧揚げには最高の場所でした。

『有馬屋敷の水天宮』

有馬屋敷内に安産の神様として有名な「水天宮」が祀られていました。この水天宮は明治5年に現在の中央区人形町に遷座され、今はその名残も有りませんが、元は有馬の御殿様が参勤交代で江戸に来ている間も、郷里の筑後川の氾濫がなく、五穀が実るように祈願する為、久留米水天宮本社から分霊を江戸屋敷内に祀らせたのが始まりです。位置としては、今、国際医療福祉大学三田病院(前専売病院)が建っている辺りだったようです。当時の大名は参勤交代で多額の費用がかかる為、収入を増やす工夫を色々していましたが、屋敷内に　神社や寺院を建て、江戸庶民にこれを開放してお賽銭を受けたり、護符を売ったりすることも収入を得る手段だった。中でも一番賑わったのが、虎ノ門の「京極家屋敷内の金毘羅様」とこの「有馬家の水天宮」だったそうです。江戸の庶民の日常会話に「そうでありま(有馬

の水天宮」などとしゃれて言われていたことからも判る様に、芝赤羽・有馬屋敷の水天宮は大変有名で人気があり、〝赤羽の流れに近き水天宮うねるやうねる賽銭の波〟と江戸の歌にも残り、安藤広重の浮世絵にも描かれています。毎月5日・戌の日の縁日は裏門を開けて一般の人の参拝を許し、江戸の遠方より来る人達は船を使ってきたそうです。その上陸地が神明の辺りで大変に賑わい、繁栄の元になったようです。有馬屋敷が青山に移転する際、三田一丁目の天祖神社(元神明宮)に分霊を奉斎しています。

**『有馬屋敷の火の見櫓』**

有馬屋敷には〝江戸の名物　高火の見〟と呼ばれた「火の見櫓」が有りました。当時、火事の多かった江戸の町には、今日で言う消防団も有りましたが大名も1つは自分の屋敷を守る為、2つには江戸市民にサービスして藩のかっこ良い所を見せようと、派手な消防団を組織しており、これを「大名火消し」と呼んでいました。中でも有馬家は代々幕府より増上寺火番役と言う大変名誉な役を拝命しており、一家の誉れとして消防活動には特に尽力していたようです。火事の被害を最小限に止める為には、一刻も早く火事を発見することです。当時、規定で、火の見の高さは三丈(約10メートル)までとなっておりました。が、屋敷裏の高台(病院裏の土手の上)に建てたものですから、藩邸の前面から仰ぐと他に類の無い高さでした。〝火の見から屋敷の名まで高うなり〟と川柳にまで歌われて有名になったこの火の見は、江戸時代の「出放題」と言う本で「赤羽根の火の見が日本一」と紹介され、連日、地方から武士や商人がやって来て大賑わいだったそうである。

有馬の火の見櫓を再現した中の橋の欄干

**『育種場』**

薩摩屋敷の跡地（薩摩藩中屋敷：芝2丁目16～22・32番、芝3丁目17～34番40～43番の北半分、芝4丁目1番の北半分、上屋敷：三田2丁目～芝5丁目7番の北半分下屋敷：芝5丁目33番～高輪の辺りに及ぶ範囲）は、「サツマッパラ」と呼ばれ、大変寂しいところでした。そこに、三田育種場という農事試験場が創られました。農事試験場というのは穀物や野菜・果物の木などを育てて実験するところです。そこでは、馬なども育てていました。そのためか、そのまわりの空き地に競馬場が建てられました。これが東京ではめて建てられた競馬場の跡地が今のNECとなりました。

『御馬の乗変へ』（小林清親　明治16年）

洋式競馬を開催するはずが･･･。欧化政策を進める政府高官がよりによって和式競馬を楽しんでいるのを皮肉った風刺画。三田育種場競馬場では、後年も洋鞍を使用せず和鞍を使用する者が多かった。

## 『江戸薩摩屋敷焼き討ち事件』

慶応3年12月25日、三田四国町の薩摩藩上屋敷は、江戸の警備をしていた人達の包囲攻撃を受けて焼き払われた。上屋敷は、現在の三田二丁目から五丁目あたり、さらには芝五丁目の日本電気のあるあたりまでの敷地で広い屋敷であった。

原因は薩摩藩の乱暴である。そのころ幕府を倒そうとする動きが起こり薩摩藩の西郷隆盛は、武力で幕府を倒そうと考えていた。そこで、幕府方から薩摩藩に戦いをしかけさせるために、江戸市内中を混乱させようとし、大勢で金持ちの家からお金を奪ったり、警備にあたっていた荘内藩の三田屯所に発砲したりして挑発した。それが日ごとに激しくなるので、ついに庄内藩をはじめとする四藩が薩摩屋敷を取り囲み焼き払ってしまったのである。

これがきっかけになって鳥羽伏見の戦いが起こり、さらに幕府が江戸城を明け渡して明治維新を迎えた。つまり、幕府は薩摩藩の挑発に乗って滅びてしまったことになる。この攻防戦は激しく多くの死傷者を出したが、この戦いに薩摩藩に協力して他藩から集った倒幕の志士達の身元不詳の多数の遺骸を北四国の地に葬った。墓石の碑面には「何妙法蓮華経　無縁供養の墓」と記されている。（藤田和彦氏編『芝を語る』に基づく）明治維新と言う新しい時代の幕開けは三田の地から始まったと言えるのである。

当時、対応に出た薩摩藩の留守居役篠崎彦十郎を血祭りに上げたところから銃撃戦が始まった。屋敷には200人ばかりが居合わせたというが、113名が捕縛され、49人が戦闘で命を落とした。日本電気（1962年当時）の北門前の片隅の枇杷の木陰に、旧い墓石があった。（戸板女子学園の脇）が東地区再開発が行われる時、鎌倉妙法寺に移転する。

## 『芝浦の埋め立て』

此処は江戸時代は海で、芝の浦はJR路線の西側。往時、新橋・汐留・浜松町は泥（こひじ：どろ）浜の湿地で（更級日記の記述）あり、家康は芝浦で塩を取れば近くて安価なのだが、入浜式の塩田（製塩には美しい砂浜が塩田として必要）を此処で持つことができなかった。このような地なればこそ、穴子・鰻が江戸の名物ともなったのだ。芝浦は埋め立てるしか使い道がない。江戸時代の東海道（国道15号線=第1京浜国道）は慶長時代の埋め立てで沖に張り出した芝浦の海際の道だった。高輪から先は高輪の浜、つまり高浜だ。その先は品川。大正時代に芝浦の海面埋め立て地を芝区に編入、埋め立ての完成を記念して、昭和10年に万国婦人子供博覧会が開催されました。このときにハーゲンベックサーカス団が来日し、「サーカス」という言葉が日本に知られるようになりました。

# 北四国町界隈の名所旧跡

**『猫塚』**

赤羽小学校の体育館の裏奥の塀際に「猫塚」と彫った碑がある。有馬屋敷の頃、飼主の仇を討って次々に人を殺した猫が火の見櫓の上で殺された話から建てられたものと思われているが、この話も史実にはない。が、「鍋島と有馬の猫騒動」で有名。明治4年に有馬藩邸が工部省所管の赤羽製作所、同16年に海軍省兵器局製作所（後に海軍造兵廠）となり、同35年には邸内の地に在った「有馬屋敷の猫塚」は表門正面へ「猫石」が移された。そして塚の上部は造兵廠移転と共に築地を経て昭和5年9月に目黒に移設されたと言う。が、台座は赤羽小学校に残され現存する塚には新たな石碑が載せられたと思われるがその由来も年月も、定かではない。小学校が創立されたときに今の場所に置かれるようになった。昭和の初めにはよくお祭りをしたそうだ。

赤羽小学校の中にある猫塚

**『蔵稲荷』**

現在は再開発された住友ビルの敷地の一角にあるが、その昔は薩摩藩の蔵屋敷の在った所にその守護神として祀られ、蔵稲荷と呼ばれたそうです。又、傍に大きな銀杏の木が有ったところから通称「銀杏稲荷」とも呼ばれていた。その他、この近くには300年来人々から親しまれてきた『柳稲荷』（松本町会の公園敷地内）や、仏・法・僧の三法を守っている『三宝稲荷』（赤羽橋交差点、京浜ボート敷地内）がある。

蔵倉稲荷

**『赤穂浪士切腹の跡』（水野監物鄭跡）**

芝５丁目22番の慶應中通商店街の壁際の極僅かの所に庭園の一部が設けられ、説明板が立っている。元禄15年12月14日、主君赤穂浪士五万三千石の領主、浅野内匠頭長矩の仇として吉良上野介義央を討ち取った四十七士の切腹の跡が港区内に４ケ所あるその内のひとつ。元禄の赤穂事件の時、四十七士の内、間瀬孫九郎正辰・間重次郎三興・奥田貞右衛門行高・村松三太夫高直・矢頭右衛門七教兼・神崎与五郎則休・茅野和助常成・横川勘平宗利・三村次郎左衛門包常の９人を預かった三河岡崎藩水野家中屋敷は５丁目15～17 20～24・26～27番に及ぶ範囲だった。この水野家は後の「天保の改革」を主導する忠邦を排出した譜代

今も残る赤穂浪士切腹の跡

大名の名門の家柄で、当時は４代目である。刃傷事件の折は、鉄砲洲の浅野邸に赴き混乱を防止した。９名は元禄16年(1702)２月４日それぞれ切腹して高輪２丁目にある泉岳寺に、亡君浅野長矩と夫人と共に葬られている。

『芝公園』

明治６年太政官布告16号によって指定された東京最初の公園が芝公園です。面積約16万坪で上野公園についで広い公園でしたが明治９年、まだ狭すぎるというので海軍省や開拓使等のお役所を取り除いたというのですから、公野の中にやたら建物を作りたがる近頃の風潮とは大分違います。当時の公園は増上寺とはっきり分かれていませんでしたが着々と整備がなされ、明治14年には豪華な設備と優れた芸者を擁する「紅葉館」が芝公園西側の紅葉(もみじ)山に開業しました。この料亭は、政治家や文学者の集う高級料亭として有名でした。金色夜叉の尾崎紅葉とその友人弟子達の硯友社、坪内逍遥等の文芸協会、また元老として昭和初期の政界を動かした西園寺公望、平民宰相原敬等が出入りしましたが、昭和20年3月10日の大空襲で焼失しその幕を閉じ、跡地には東京タワーが建てられています。さて芝公園はこうして市民の憩いの場として大きな役割を果たしてきましたがやがて戦前、戦後の混乱を反映して、競技場や水泳場は米軍に接収され後に西武のものとなりました。また、国家と宗教の分離政策の一環として芝公園の中心部約50,000坪が増上寺と東照宮に払い下げられ現在のようなドーナツ型というかベルトみたいな公園になってしまいました。

『古墳』

亀塚古墳)

三田２丁目から聖坂を登りきると、左側に亀塚公園があり、こんもりとした丘があって「亀塚」とよばれている。これは円墳であって、弥生式土器なども出土していることから、すでに古代にはこの地域にも豪族が住居するようになっており、多くの集落もあったと考えられる。

また、平安時代に書かれた「更級日記」の中に、武蔵国出身の兵士と京の御所の皇女の物語があり、二人の住んだ跡がここにあった竹柴寺だといわれている。

丸山古墳)

芝公園一号地の中に小高い山があるが、これは港区でも一番大きい古墳で「丸山古墳郡」と呼ばれている。紀元５・６世紀頃と思われる豪族の墓である。古墳と思われる盛り土の一番大きいものは東照宮の裏手にある。南北に長く瓢形（前方後円）で約150m高さは北方の後円部で約８m南の前方部で約７mある。明治以来前後２回に亘って調査が行われた。それらの調査では古墳の西側周辺にある10基の円墳群は、同時代の陪塚と考えられていた。しかし戦後の調査研究によって、この大小古墳群は丘陵上の大古墳より300年ほど後に作られた物であることが判明した。しかし残念なことに西武鉄道のゴルフ場造成の為に大古墳の大部、小古墳群総てが削り取られてしまい、今は ゴルフ場も潰れ、ホテルに建て替えられ面影が無くなってしまっている。

## 『増上寺』（三縁山広度院：さんえんざんこうたくいん）

「今鳴るは芝か上野か浅草か」と俳句に読まれている芝増上寺。今では東京タワーやボウリング場・プリンスホテル等が山内に造られて昔日の面影はすっかりなくなってしまいましたが、かつては江戸市中最高最大の寺として市民の崇拝の的となっていました。増上寺は何故それほどの大寺だったのか？この寺が徳川将軍家の菩提寺だったからです。

増上寺は浄土宗鎮西派の大本山。創建年代は不明だが武蔵国豊島郷貝塚：江戸貝塚（現在の紀尾井町・紀尾井ビル）の辺りに在って、「光明寺」と言い七堂伽藍の整備した真言宗の大霊場だった。開祖は宗春大僧都と伝えられ、建武の頃（1334～5）西誉聖聰（ゆうよしょうそう）上人により、再興し北朝の至徳2年（1385）に浄土宗に改めた。明徳4年（1393）浄土宗第八祖聖総上人によって三縁山増上寺と改称。関東での浄土宗の正統念仏道場となる。天正18年（1590）に家康が武蔵国を領地として与えられて初めて江戸にやって来た時、増上寺山門の所まで来ると乗っていた馬がどうしても動かなくなりました。行列を見ていた増上寺住職の存応上人が念仏を唱えるとやっと馬は歩を進めました。そこで上人に徳川家の寺になってくれるよう家康が頼んだと言う事です。そして家康の入府を受け江戸城拡張とともに、慶長3年（1598）現在の港区芝に移転されました。

増上寺正面

## 『旧徳川霊廟』

御霊屋

増上寺には、二代秀忠公・六代家宣公・七代家継公・九代家重公・十二代家慶公・十四代家茂公、6人の墓所が設けられています。この他、各公の正室と側室の墓も在り、その中には家茂公正室・悲劇の皇女として知られる静寛院和宮も含まれています。アメリカ軍の現在の無差別空爆によって燃やされた旧徳川霊廟は、現在の大殿の南北（左右）に立ち並ぶ壮麗なものであった。昭和33年綿密な調査が行われた後、発掘した土葬の遺体は荼毘に付され100分の1に規模を縮小した現墓所に改装された。

現存する徳川墓所は門が本来家宣公の墓前に在った鋳抜き（鋳造）の中門で、中には各公の石塔と各大名寄進の石灯篭が配置されている。

## 『江戸開城談判の跡』

西郷隆盛の筆になる「江戸開城　西郷南州・勝海舟会見の地」という記念碑が三田駅のすぐそばに建てられている。

徳川２６０年の太平の夢は崩れて、官軍が江戸の地へ乗り込んできた。幕府は抵抗を試みたが、上野の山にこもった彰義隊が破れ、明治元年4月11日ついに降伏の調印式が行われることとなった。そこで名高い西郷隆盛と勝海舟との会談が、この地、四国町で行われた。両人は堅い握手を交わし、江戸無血開城で徳川幕府は倒れ、こうして江戸の町は焼討を免れ、東京と改称して今日の繁栄を築いた。この会談を記念して昔の都電「三田停留所」駅前、旧東海道：現在の第1京浜国道(R15)に面して第1田町ビルの前庭(5丁目33番)に、西郷南州(隆盛)の孫の吉之助の筆になる記念碑が建立されている。また、田町駅構内の壁面にその状景がレリーフ画として描かれている。

江戸開城談判の跡

七福神（弁天様）

## 『宝珠院（弁天様）：港区七福神』

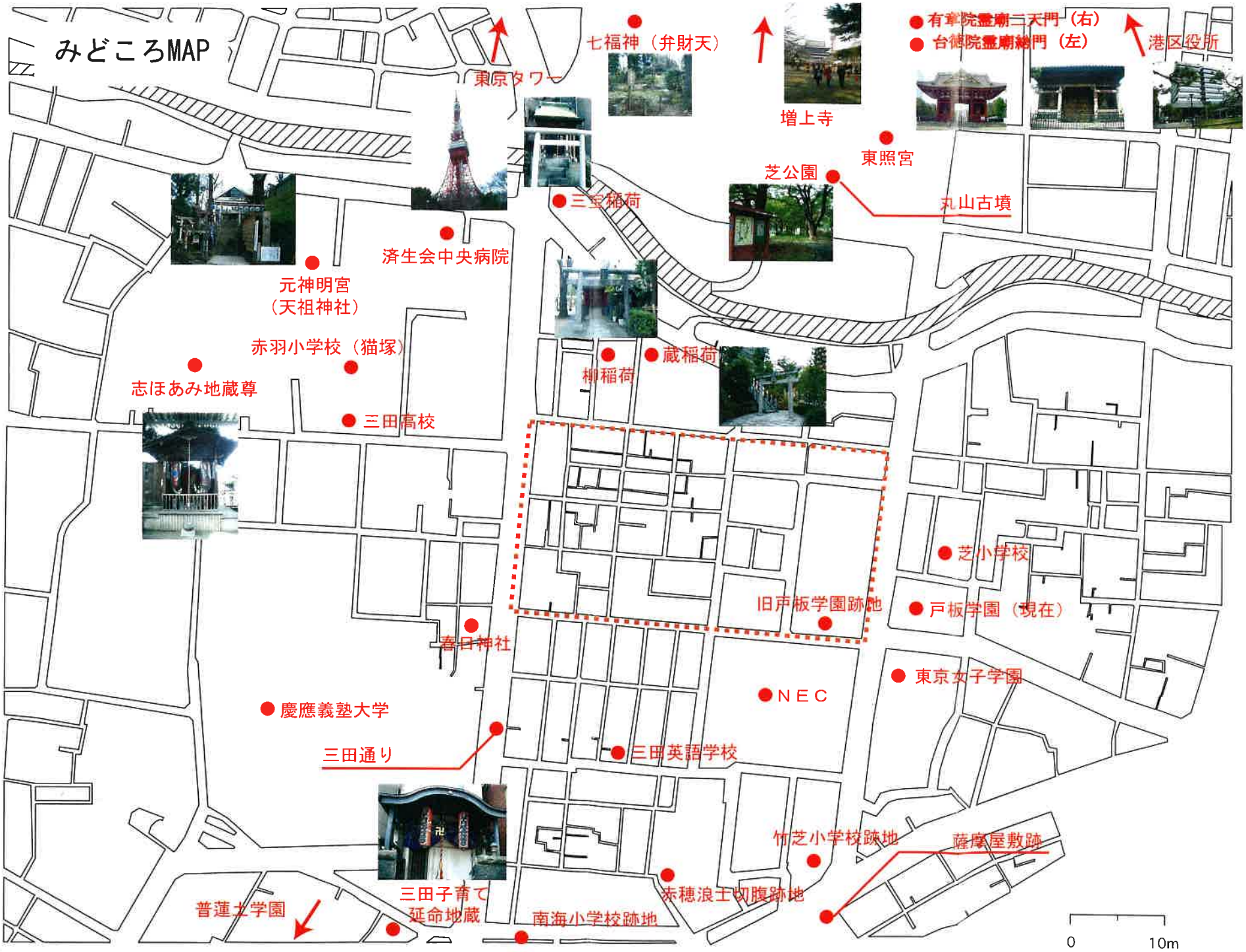
芝増上寺山内柵門を入り左手に、子聖・薬師を相殿として、貞亨2年(１６８５）の作と言われる閻魔大王像（区指定有形文化財）を安置して別当浄土宗宝珠院はあった。現在は、増上寺とは別に存在し、この他、港区七福神の弁財天を祀っています。昔は東京タワーのふもとから滝が流れ込んでいた弁天池の中島に在った。池を見ながら一杯飲めるような料理屋があり、境内ではカブト虫も採れた。明治以降の区画整理で現在の池の脇に移動しました。

## 『芝東照宮』（旧安国殿）

増上寺の南側、現在公園になっている辺りは戦災で焼失するまで、二代将軍徳川秀忠公の壮麗な霊廟があり、その南隣（芝園橋寄り）に東照宮が祀られていました。東照宮は日光が一番有名ですが、家康公亡き後の幕府がその権威を高め社会の安定化を図るために、家康公ゆかりの各地に東照宮を造営しました。芝には木造の徳川家康座像が、元和2年遺命により増上寺より移され安置してあります。大正時代、徳川家康の命日、4月17日が例大祭で、毎年境内から芝公園に至まで大変な人出でした。

しかし、昭和20年の戦災で社殿が焼かれ、現在はコンクリート造りの小さなお社が残るだけになり、日比谷通りから入ると社殿向かって右手に家康公手植えの銀杏の巨木(都天然記念物)が三百余年の歴史の移り変わりを見つめてひっそりと立っているばかりです。

芝東照宮


みどころMAP
東京タワー
七福神（弁財天）
増上寺
有章院霊廟二天門（右）
台徳院霊廟総門（左）
港区役所
東照宮
芝公園
丸山古墳
三宝稲荷
済生会中央病院
元神明宮
（天祖神社）
赤羽小学校（猫塚）
志ほあみ地蔵尊
三田高校
柳稲荷
蔵稲荷
芝小学校
旧戸板学園跡地
戸板学園（現在）
春日神社
東京女子学園
ＮＥＣ
慶應義塾大学
三田通り
三田英語学校
竹芝小学校跡地
薩摩屋敷跡
三田子育て
延命地蔵
赤穂浪士切腹跡地
普蓮土学園
南海小学校跡地
0
10m

# ０４：北四国町周辺の道と歴史

昭和初期の三田通り
（春日神社　三笠季枝さんに頂いた地図をもとに作成）

## 三田通り（１）

明治24年　慶応正門から札の辺に向かった様子。

←慶應大学

主人が浮世絵のエキスパートだった。

鈴木唐物（洋品）店・三色屋

丸久タバコ店

多田質店

旧店舗の上がりブチに、福沢諭吉先生が腰掛けて世間話をしていたのが主人の自慢話のひとつ

芝市場

亀田履物店

藤波紙店

入山ガラス店

直栄靴店

江戸時代からの店で、奥様は東京百美人のひとりだった。

松永スポーツ用品店

道明漢方薬局

鈴木花屋

加藤洋食店

寺島屋清水商店

ドラ焼きで有名

大和屋雑貨店（関口）

畑化粧品店

小田原呉服店

倉持書店

青柳和菓子店（森久太郎）

人兼屋玩具店

講談に出てくる俳人、「秋色女」の子孫」故に秋色最中が有名。

金文堂書店

松尾モスリン店

南天堂薬局

小沢商店

松山病院

葉茶屋

大阪屋和菓子店

大和屋カバン店

一枚五銭の固焼きせんべいが絶品

大黒豆屋

小林ローソク店

加藤布団店

中村屋薬局

三田水練かまぼこ屋

中島金物店

町田そば店

定方足袋店

百足屋呉服店

墨坂

玉子屋（肉屋）

書店

乾物屋

うらしま焼芋店

材木屋

有賀・塗料店

ざる屋

郵便局

西宮葬儀社

菓子店

鳥肉屋

百瀬味噌店

←札の辺

三田三丁目

次のページへ→

パン屋

◎松の寿司

藤波倉庫

豊前屋酒店

福沢諭吉先生が故郷の豊前より連れて来た店

釜七（刃物屋）

『阿波横丁』↓

安心堂（洋品店）

若林写真店

浪花屋菓子店（広岡）

夏は氷など、冬はあたたかいものを売っていた。

椎野布団店

調和堂時計店

関口洋品店

額縁屋（勝島）

岸田書店

栄太郎和菓子店

栄太郎チェーン店のひとつ。

三田日活館

昔は三田演藝場だった。

中島瀬戸物店

柏屋食料店

花銀（小西）

講談に出てくる。人入れ稼業、花屋金べえの子孫。

写真屋

和田布団店

昭和銀行

『おしるこ横丁』↓

◎竹屋蕎麦店

山崎床屋

秋元眼鏡店

田村ハケ店

依田忠塗物店

中島鯛焼き屋

中田婦人服店

安田銀行

渋谷ガラス店

伊勢島雑貨店

四方酒店

義士が引上げの途中で酒を飲んだところ。

伊藤文具店

帝国銀行

工場

朝日新聞

石田文具店

↑昭和34年　三田通り（三田三丁目付近）

↑明治40年頃　三田通り（三田三丁目付近）

公設市場

昔、札の辺のすぐそばに三田市場というのがありました。それが今のスーパーフェニックスのところに移転して「芝市場」と名称が変わりました。

# 三田通り（２）

三田通りには学生が利用する店がたくさんありました。学生街として知られていますが、特に関東大震災の後などは、大変繁盛しました。三越デパートが引っ越してくるという話があり、三田通りのの人達が反対したそうです。
春日神社のあたりは昔から賑やかだったそうです。

←慶応大学

（外国書籍）丸善三田出張所
東京貯蓄銀行支店
神谷床屋
↑春日神社
呉服店
乾物屋
三田書店
エビスビアホール
五十川靴店
アサヒ食堂
鳥羽帽子店
竹林文具店
現在はケーキ屋
超有名だった――今井スケート靴店
慶応生がコンパなどで使用していた店
天井常盤屋
（大庭）
丹波傘店
田島佃煮店
袋物店
（三井）
福島屋書店
うなぎ岡田屋
今は芝3丁目で電気屋さんを営業中
浜野油店
大塚薬局
（竹の子飯の店）栗餅屋
神谷写真店
伊藤帽子店
ベーカー堂
小坂古本店
◎三田の松竹梅
松一寿司や
竹一そばや
梅一時計屋
相徳タンス店（井上）
上野洋服店店
間島屋酒店
三田の松竹梅の一軒
◎梅屋時計店
喫茶店
手塚家の壁
剣道具店（加藤）
鶴屋呉服店（富永）
（中本）
下徳家具店（毛受）
大橋庄助・紙屋
徳文堂書店（家田）
竹内楽器店
先祖は義士の引上げを見た。
マスヤ
栃木屋
済生会病院
法務局
三田署

←前のページへ　慶應義塾前　赤羽橋へ→

花平花屋
加藤くだもの
山本自転車屋
黒柳塗料屋
（祖谷）
川村ガラス店（額縁）
（鴨打）
（高橋）
鈴木屋餅菓子店
（露木）
（辻端）
（鈴木）
つるや呉服店
そば屋
ガレージ←料亭「いろは」の跡
『いろは横丁』→
丸二家具店
（小林）
（大木）
金物田中商店
日本体育（リュックサック）運道具店
松屋瀬戸物店（中島）
→春日旅館
現在の文事堂の場所
現在も営業中
伊藤洋裁研究所
日本洋裁の草分け
飴店
簡易旅館
（清水）
（倉）
田中薬局
青木楽器店
杉山せともの
田崎写真店
三味屋中華料理店
（藤野）
東京三田種育場（磯村種物店）
『種物横丁』→
小川洋品店（既製服）
（葉抱）
本田餅菓子店
旗屋寺田商店
山口洋品店（紳士服）
山中傘屋
（藤田）
（大関）
渡辺カバン店
古本屋
栗原三味線店
大和フルーツパーラー（関口）
今半（スキヤキ屋）
（福永）
木村そば屋
安田銀行支店
オリンピック洋食店
（中村）
（田中）
日在堂文具店
井沢洋服店
東洋軒

昭和初期の三田通りの様子

昭和34年4月10日
この日は、美智子様の御成婚パレード。
この頃の三田通りはアスファルトでなく石畳だった。

# 三田通りの思い出

三田（御田）は古くから町屋（普通の人の住む家）が多い所で、三田通りは春日神社を中心に色々な店が並んでいた。路面電車が通り、銀座に商売の中心が移るまで大変栄えていました。その商売繁盛の理由としては、七大黒（寄席）・今半（スキヤキ屋）・三田子育延命地蔵の縁日の3つが在ったからだと言われていますがしかし、何と言っても慶応義塾と共に発展してきた三田の町。開校以来、三田の山に出入りする学生･関係者からの情報が多く集まる為、三田の通りもそれにつれて、当時としてはモダンな雰囲気のある町で、流行の先端を行く今の銀座通りや表参道のような感じでした。今の「銀ブラ」のように「三田ブラ」と言う言葉が有ったほどです。

学生の町として本屋さんや飲食店が建ち並び、中でも紳士物の洋品店と、オーダーの洋服屋さんは数多く、高級仕立てで中々評判が良かったようです。

飲食店では一流の洋食でしたら「東洋軒」･「食道楽」が有名、又和菓子しか知らなかった頃でしたが、アメリカ帰りのご主人の作る本格的洋菓子の「ベーカー堂」のケーキが慶応の先生方には好評のようでした。戦前まで特に有名だったのは「粟餅屋」の〝竹の子めし〟です。二間足らずの間口でうなぎの寝床のような細長い店でしたが学生の間では〝三田のノコメシ〟と呼ばれ、一日中繁盛していました。今のように缶詰めや冷凍などの無い時代、竹の子と言えば一年のうちのほんの一時期しか食べられない物でしたが、店の工夫で大樽に一杯の竹の子を酢漬けにして保存し、一年中おいしい竹の子めしを食べさせていました。値段も〝もり〟〝かけ〟程度で安く、さっぱりとした味で、当時の塾生でこれを知らない人は無かったほどです。

この他、三田警察（三田署）の角から赤羽橋まで幅2メートル程の大どぶが有りました。子供達も近寄らない水の濁ったドブ川でしたが、夏になると金魚屋さんが裸足で中に入り金魚に食べさせるボーフラを大きな網で掬いに来たりしていました。震災後、そのドブを厚板で塞ぎ、八百屋･魚屋･乾物屋など、日用品の小売市場がたち、〝やっちゃ場〟と呼ばれて生活が落ち着くまで賑ったものでした。

## 三田通り（桜田通り）の思い出

①行還幸啓路
昭和天皇が東宮（皇太子）の時、現在の高松宮邸の処が、東宮御所だった。大正天皇がご病弱だったので、政務を執るために昭和天皇は、毎日、三田通りを通って皇居に通っていた。昭和天皇にとって非常に親しみのある、思い出のある通りであった。

②高松宮様が宮家を創立されて高輪東宮御所が高松宮邸となり、高松宮様が外出なさる時は必ず三田通りを通ってお出かけになった。（伊皿子の坂を下ってくる早道）亡くなられた昭和62年は、聖坂を下らずわざわざ伊皿子から魚藍坂下へ出て、慶応大学の前を通って、大回りをして、三田通りを通って葬祭場に向われた。その時、恩賜財団の済生会の仕事（名誉総裁）をなさっていたので、済生会の職員一同が三田通りに並んでお見送りをした。

③御会式（万燈練供養・日蓮聖人入滅の日にかけて１０月１２日～１３日に行われる法要）・・・昭和１１年頃まで通っていた。
本所深川などの下町やこの辺りから来る講中の人たちが池上本門寺へお参りする時の通り道だった。芝の山内を抜けて赤羽橋を渡り、三田通りを通り、聖坂を登り、伊皿子へ出て「せんぱ病院」の前を通り、左へ折れ品川に出て、右へ曲がり八ツ山を越え、旧街道に入り西へ行き、大森近辺の所から右へ入り、池上通りを通って本門寺へ。各地から１００を越える万燈講中が参詣の為に大きな万燈を掲げ練り歩く姿は、凄く賑やかで子供の頃よそ行きの羽織を着て見ていた思い出が有ります。

④戦前、郷土連隊の第一（芝・麻布・赤坂の人達等が編成された部隊）と第三連隊（下谷・浅草・練馬の人達など）の歩兵たちが、富士板つきの演習場から真夏の盛りに通りを通って連隊へ帰ってゆく。見ていても可哀想になる位の強行軍の演習をよくやっていた。

⑤昭和１１年２月２６日（二・二六事件）の翌日芝浦に海軍の軍艦が入り、陸戦隊が着剣してヘルメットを被り重装備をしてトラックに乗り込み、運転台の上（臥境）には軽機関銃を据え、何台も何台も三田通りを通って虎ノ門のほうへ海軍省などを警備しに向っていった。

⑥同、昭和１１年、二・二六事件が失敗に終わると、第一師団に動員下令が出て、満州へ移駐する為、郷土連隊（第一・三連隊）が三田通りを通っていった。連隊長の牛島大佐（沖縄で玉砕された軍司令官の牛島中将）が先頭で馬に跨り、第一連隊を率いていた。

⑦美智子皇后の御成婚当日パレード前夜来の雨がすっかり上がり、三田通りは、今日の慶事を祝うかのごとくすばらしい朝が明けた。通りは掃き清められ、打ち水を打ったごとく朝日にきらきらと輝き、其処を溜め色の宮廷車に乗車し、皇居に向かわれる美智子妃の美しさは奉迎に並んだ人々の心に焼きついた。

⑧２～３回、電車を花で飾った花電車が通った。昭和天皇即位の大礼・関東大震災復興記念の時。

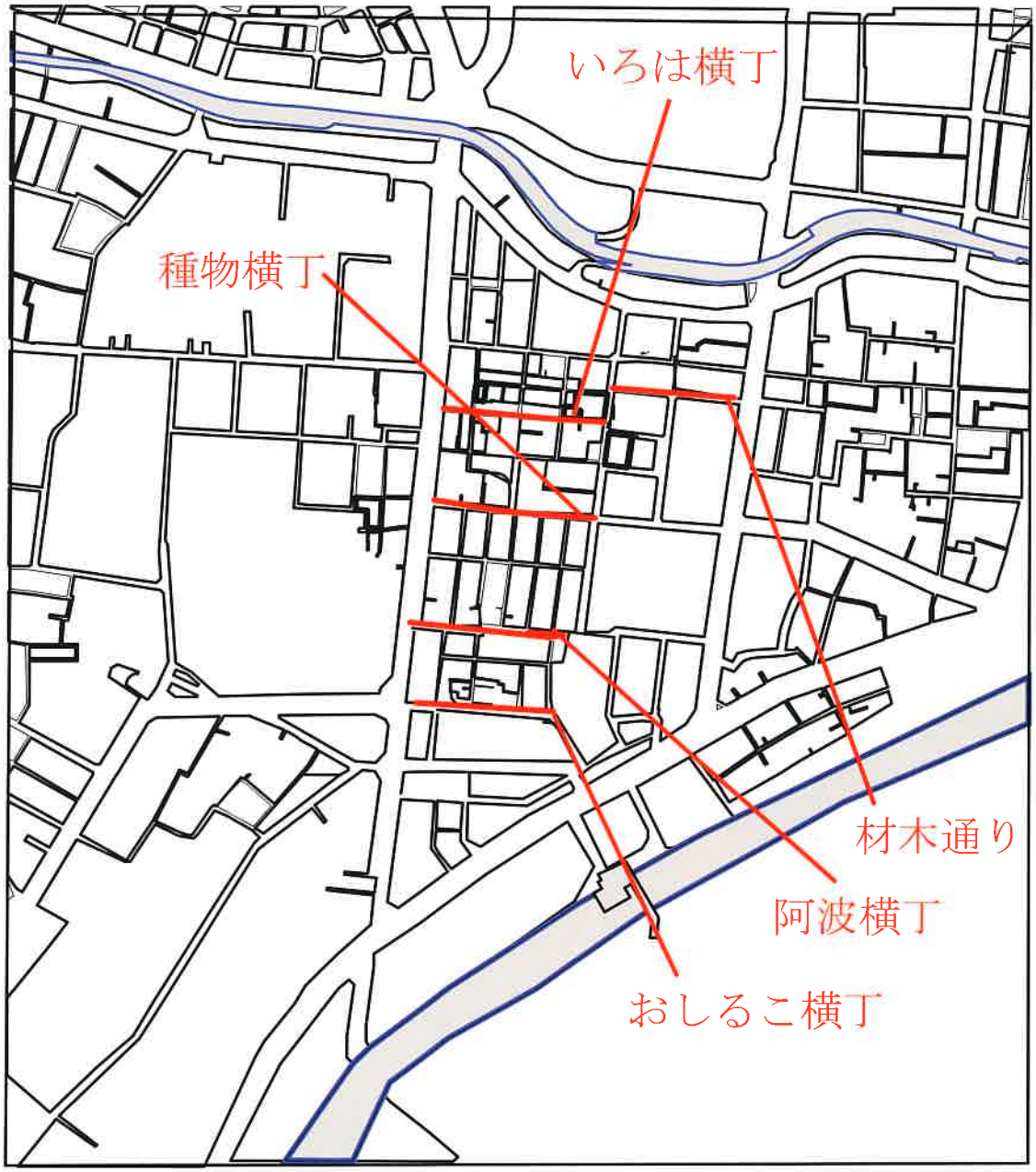
⑨昔、三田通りはアスファルトで夏になると通りがグニャグニャになった。馬力、馬の引く車の轍が中に食い込み馬は歩きにくかった。それがタイヤになり良かったな～と子供心に思ったものである。トラックなども生ゴムが嵌っているようなノンパンクタイヤで、スポークは木製。跳ね上げが酷いので、泥除けがタイヤの脇に下がっている状態だった

⑩カンテラ行列・提灯行列

三田通りでは明治２７年11月26日、日清戦争勝利を祝って教職員25名、慶応義塾生2300名が塾長小端篤次郎を先頭に、カンテラ・万灯・高張堤灯を押したて、東京市中音楽隊の演奏に合わせて塾長の作った歌を高唱しつつ、三田から二重橋まで行進し、君が代を歌い、両陛下万歳を唱え再び行進して帰塾した。沿道いたるところ人の山で家々も国旗を翻し、軒提灯を吊るして歓迎した。明治時代に12，3回、大正・昭和もそれぞれ2回づつ行われ、昭和7年5月、塾創立75年祭を最後にカンテラ行列は途絶えたがその後、このパターンが定着したようで、関東大震災前の6大学野球で慶応が優勝した時の提灯行列、先頭にはペンのマークの付いた高張提灯を掲げ、それに続く学生はブルーエンドブルーのほおずき提灯を振りながら応援歌を歌い、大行進をして帰ってくるのが恒例となりました。が、義塾の一部他所への移転と共に、昭和60年ごろ完全優勝を成し遂げた時の提灯行列を見たのが最後でした。

出典：中川敏雄氏の話をもとにまとめました。

# 横丁(1)



阿波横丁

おしるこ横丁

材木通り

## いろは横丁

明治中頃に横丁の入口、右角に「いろは」と言う立派な骨組みの大きな料理屋（日本で初めての牛鍋屋）が在った事から、いつの間にか「いろは横丁」と呼ばれるようになりました。木村壮八（小説家）の生まれた家です。この店の主人木村壮平氏は中々のやり手で「いろは四十八文字で48支店を出す」と言う心意気で名付けた店の第１号店でした。次々に増やす支店は、皆それぞれ主人と特に関係の深い女性に任され、とうとう28軒目で亡くなったのですが、まったく男冥利に尽きる羨ましい話です。
この葬儀が又、大したもので支店の女将が揃って黒の喪服を着て丸髷を結い、人力車二十八台を三田通りにズラリと並べた光景は荘観でした。松村逍風の著書「近世名勝負物語」に登場し、明治の男の大きさを感じさせる有名なお芝居になった話です。現在の「いろは通り」。

## 阿波横丁

豊臣秀吉が大名に取り立てた阿波の蜂須賀中屋敷があったことが由来。中屋敷の門は、現在世田谷鳥山のお寺の山門となっている。昭和10年代には角に『釜七』と言う金物雑貨屋があったので通称『釜七通り』と呼ばれていた。現在昭文社の地図には「五十番通り」と書かれているがこれは終戦後、王貞治選手の父親と一緒に中国浙江省を出てきた人が「五十番」という中華料理屋を安心堂の跡地で開き、これが通称となったのだろうと思われるが、住民に聞いてもはっきりしない。

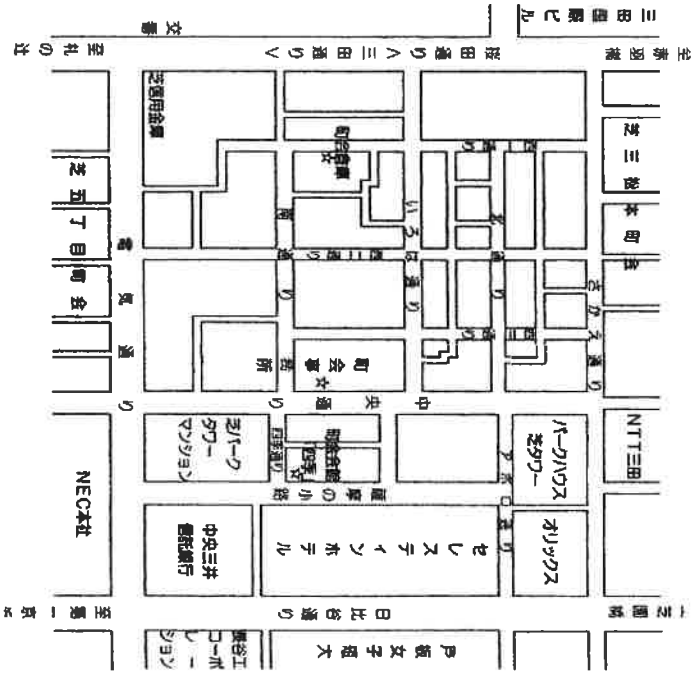
## おしるこ横丁

現在の慶応仲通り商店街。当時は舗装しておらず、雨がふるとぬかるんでしまっていたので、慶応の学生が呼び名をつけた。

## 材木通り

昔は古川で運ばれてきた材木を扱う材木屋が多くあったので「材木通り」と呼ばれていたが1968年10月11日11：02am45秒、世界初の有人ロケットアポロ７号の打ち上げ成功を記念してアポロ通り」とすることを町会で決めた。

☆H19年2月28日　応募により町内の通りの名前が右図の様に決まった。


三田警察署
三田図書館
文学の森
三田通り
いろは通り
三田小学校
慶応仲通り
中通り
三田中学校
三田小学校
三田図書館
三田郵便局
三田中学校
三田小学校
三田図書館
三田郵便局
三田中学校
三田小学校
三田図書館
三田郵便局

# 横丁(2)

今、芝信用金庫の在る所は、昔は「三田種育場」と言う植物の種や苗の卸・小売や、農機具・草刈り機等も大きく商っていた店でした当時としては珍しい木造の三階建ての店で、とても目立った為、そ横丁を「種物横丁」と呼んでいました。

種物横丁には小さな「七大黒」という芝居小屋があり、旅芝居の一座がかかったり、寄席や安来節・琵琶の演奏・選挙演説会など、様々なものが舞台に上がっていました。飯倉（麻布森元町）には明治維新後、森元座・高砂座・高盛座　の３軒の芝居小屋があり、”引幕・廻り舞台は許されず、緞帳芝居と称して、大歌舞伎が桟敷4円20銭、一人当たり80銭にたいして　こちらは一人8銭の安さで、山の手は言うまでもなく下町からも沢山の人が出かけてきて、大繁盛の芝居を演っていました”と「明治百話」に書かれていますが、こちらはもっと安かったようです。

「花柳甘味処」は有名なお汁粉屋で、塾生の溜まり場となっていました。女優 南田洋子のご両親（北田）がやっていました。

商店の奉公人には 家下がり（やどり）と言って年 2回、1月15・16日と7月15・16日の公休日が有り、この日は「地獄の釜の蓋も開く」と言われ、誰でも皆仕事を休むことになっていました。この日に因んで行われる芝公園の閻魔様のお祭りは、東京でも特に盛大で、大人も多く訪れ、子供達も大変楽しみにしていたと言います。

昭和１０年代には街路の中央に電線を渡し、所々に間隔を置いて電球を金網で覆った電灯を吊るして「商店街灯」としたので『電気通り』と呼ばれるようになりました。これは、日本での商店街灯のはしりと思われます。

# 昭和十年代の種物横丁（電気通り）

三田通り

←

小川洋服店
郵便局
高須医院
自転車店
森永製菓事務所
注文洋服店
ミルクホール
吉川薬局店

毛受（めんじゅ）オモチャ店
野口染物屋
星野下駄屋
鈴木餅菓子店浪花屋
山田米店
国見かもじ屋
日比野布団店

宮嶋畳店
花柳甘味処
住吉屋呉服店
三洲屋乾物店
奥田御茶屋
魚惣魚屋

米山煙草店
平澤洋服店
新津谷理髪屋
エビスベーカリー
中山洋品店
島津刃物店
三木下駄屋

油屋
村田時計店
茨木経師屋
金子歯入店（履物修理）
竹内コーヒー店
電気ラジオ店
日吉屋乾物店

八百屋橋川
木村蓄音機店
魚峰
山田下駄屋
理髪玉川軒（矢田部）
神谷菓子店

日本電気
↓↓
日本電気正門

→

三田種育場（通称種物屋）

床屋富井
漬物屋
麻雀屋
小林家具店
小林ピンポン場店
眼鏡屋
（葉山）
小泉浪花屋
浜野ガソリン店

皆川酒店
三田軒（村田中華）
留永ビリヤード
倉庫
七大黒（演芸場）

大橋工具店
須山帆掛寿司

山本自転車店
今井煎餅屋
小菅工具店
野村煮豆漬物店
広村蕎麦店
北村菓子店
千賀糸屋
越後屋呉服店
八百屋竹内

もみ治療中村
（安藤）
林硝子店

原地金屋

尾張屋酒店河合
杉本美容室
中島注文洋服店
滝沢化粧品店
姫の湯

交番
↓↓
高尾　商店街　→

いろは横丁（平成16年）

種物横丁（平成16年）

拡大詳細

日本電気

◎交番

深井運送
小島炭屋
杉野写真店
高橋硝子店

石井米店
三田倶楽部

大清院（妙法寺別院）
清正公様　藤田

山崎靴屋
澤田
池田
鈴木

戸板高等女学校
裁縫女学校

吉野
高尾　商店街　→

三田至　市電『四国町停留所』（白山行き1番）　日々谷至

# 05：地域の移り変わり

## 松葉谷　妙法寺　（まつばがやつ　みょうほうじ・通称苔寺）

昔の地図を見ると電気通り沿いの敷地に神社の⛩マークが在りましたが何時からかお寺のマーク卍に変わって、その後、戦後に戸板学園が登場する。その卍マークのお寺がこの妙法寺別院の大清院である。

建長5年(1253)日蓮大聖人が安房より鎌倉に来て、松葉谷に庵を結んだ日蓮宗最初の精舎が起源となる妙法寺の別院が、この北四国町に有った。この別院で生まれ１５歳までの幼少（小学校４年までは芝小、新しく市立赤羽小が出来たので５年から赤羽小に編入学）を過ごしたと言う先代御住職・藤田教忠氏（大正５年生まれ）にお話を伺った。

妙法寺が江戸に別院を設けたのは文化5年。深川富岡八幡のお祭りの時永代橋が落ち多数の死者が出た。その供養を任され、当時は今の明治座の近く日本橋浜町を拠点にして日本最初の川施餓鬼を８月４日に隅田川の永代橋上流の中洲水域で行った。幕末、慶喜の大政奉還により無血革命で明治に入ろうとしたが、西郷軍は幕府を朝敵にして徳川家を潰さないと本当の維新は出来ないと考え幕府軍を挑発した。益満休之助を派遣し、無頼の徒を集めてお膝元である江戸の治安の攪乱を企て、白昼からも火付け強盗等をして役人が追いかけてくると薩摩屋敷に逃げ込んだ。赤羽橋で新撰組の清川八郎が殺されたが、闘えば朝敵になる、屋敷に逃げ込まれ手出しが出来ないことが度重なり、幕府方もとうとう堪忍袋の緒が切れて屋敷を襲撃したのが慶応3年12月25日の朝方。両軍とも大砲を持ち出しての激しい戦闘であったらしい。「薩摩屋敷焼き討ち事件」で戦死した両軍の死体が多数有ったこの地に、明治25年12月薩摩屋敷事件戦没者の墓という無縁供養塔を有志が建て、その霊を弔う為に妙法寺は北四国町に別院（大清院）を移転した。又境内には「清正公の祠」や、江戸歳時記に書かれている（霊験あらたかと民間で言われ、新橋・芝浦芸者の信仰を集めていた）「お稲荷さん」も納められていた。

毎年8/4の妙法寺川施餓鬼はとても有名で100ぐらいの日蓮系の「講」が交代でお参りに来ていた。寺では5艘の船を隅田川に繋留して施餓鬼を執り行い、人々は納涼して帰って行った。又、毎年12月には薩摩屋敷跡の戦死霊の供養をしていたし、別院では昭和17、18年頃まで北四国から鎌倉の本殿まで「節分講」を設け参詣も行い、多くの檀家を抱えた地元の有名なお寺であった。

妙法寺ご住職

妙法寺正面

無縁仏の墓

関東大震災で日本電気旧赤レンガ社屋は残ったが、大正の初め向かいに建築された日本電気新社屋は壊れ、妙法寺別院の本堂も潰れた。銀座方面からの火を芝大門･芝園橋・金杉橋辺りでくい止めた。この辺りでの出火は無く、幸いお寺では怪我人が出なかったので皆で町内被災者の救出・救援にあたった。しかし、災害を免れたこの別院も昭和20年､終戦時「防火地域」を造る為国により強制的に鎌倉に引き上げさせられた。

先代御住職の記憶にある北四国町は七大黒（寄席）が有り、別院前の通りには、毎月1.15.30と百軒位夜店が出て縁日が立つ賑やかな庶民の盛り場だった。別院の隣には円笑が住んでいたり、近くにりっぱな大銀杏の木や大井戸があり、三田演芸場（映画館）、海苔屋・氷室屋・蝋燭屋・蹄鉄屋・粟餅屋・炭屋・家具屋･袋物屋が建ち並び、高峰三枝子のお父さん（琵琶姫新流家元）が住んでいた事・芝浦の三業地（常陸の本社から祠を帰しても繰り返し漂着したので祭ったと言う「鹿島神社」に平行の路が花柳界だった）には「生簀（いけす）」という細川力蔵（目黒雅叙苑を開業）の造った有名な小料理屋があった事、6の日の西応寺（芝2－25－6）の縁日、4の日の三田三丁目延命地蔵さん縁日､2の日の芝不動（芝2－12－16）の縁日、震災後にできた映画館芝園館、地元の少年野球での活躍など幼少時代をすごされた北四国の地、江戸下町の色々な風習や風俗を受け継いでいた当時の北四国について懐かしそうにお話をして下さった。今もお盆には、当地の檀家の所へ現住職のご子息が訪れているそうです。

（付録）　当会の賛助団体、徳聚山圓珠寺は慶長１７年（1612）、松平家の下屋敷が並ぶ海沿いの町（芝金杉）に東海道に連なる浜辺に沿って創建され、中正院日護上人の弟子の圓妙院日匠上人が日護上人彫刻の釈尊像を本尊とし開山しました。江戸後期の当山の様子は葛飾北斎の浮世絵「金杉橋芝浜」等でも偲ばれます。北四国町に一時住んでいらした、前ご住職が町内の檀家を尋ねる時、戸板学園の裏辺り新堀町から西応寺町へ抜ける"薩摩の七曲がり"でよく幽霊と出逢った話をされたと檀家の方より伺いました。昔、この妙法寺別院の御住職（藤田氏の父様）もその辺りに霊が迷い出ると言うので、当時本堂の2階から手を合わせ、浮ばれない霊を供養したと言う事です。

圓珠寺ご住職

# 地域と小学校のつながり

この四国町周辺には、大名屋敷跡地の大きな敷地が在った為、多くの学校が誘致されました。

①南海小学校（明治４～平成１２年）三田３－４－２２
　三田、春林寺を借り授業を始める。同6年、区内幼童学所と称し同7年、第7番小学南海小学校となる。南海尋常夜間学校併設。御田小学校に統合される。旧校舎は現在跡地は三田図書館。

②芝小学校（明治１２年～現在）芝２－２１－３
　第一大学東京府第二中学区３９番　公立小学校芝学校として開校。明治２２年小学校の敷地に新しい大きな道路を造る為三田四国町２番地に敷地を買い、引越しを計画、新しい校舎を建てる計画をすすめましたが，大火事のため中止になりました。その後、薩摩藩の屋敷があったところ（芝２丁目から芝３丁目・４丁目・５丁目）に仮校舎を建てることにしました。大正８年頃神明小学校に３１０名の生徒が、大正１５年には　赤羽小学校に３００名の生徒が、昭和４年には竹芝小学校に２８２名の生徒が分かれて行った。平成元年、竹芝小学校を併合する。現在６学級１２４名

③御田小学校（明治５～平成１２年）三田４－１１－３８
　明治5年、三田台裏町、薬王寺に開蒙舎を創立。同6年、第3番小学御田学校となる。平成１２年４月に、開校１２６年の南海小学校と１２７年の御田小学校を統合して、新しく開校した小学校です。三田台にある旧御田小学校の校舎に新御田小学校としてスタートしました。現在９学級２２９名

④神明小学校（大正３～平成７）
　平成３年、桜田・桜・鞆絵の３校の統合により開校し、平成６年に桜川小学校が統合された御成門小学校に翌年神明小学校も統合される。現在１１学級２８５名

⑤竹芝小学校（明治４０年～平成元年）金杉浜町７１番
　明治40年、芝浦小学校の名称で創立。昭和2年、竹芝尋常小学校と改称、竹芝尋常夜間学校併設。現在跡地は港区立心身障害者福祉センターとなっている。

⑥赤羽小学校（大正１５年～現在）三田１－４－５２
　赤羽尋常小学校として開校、昭和２２年現在の名称となる。現在１４学級４０６名

⑦飯倉小学校（明治１１年～平成１６年）東麻布２－１－１
　明治11年、飯倉小学校として開設。昭和21年3月飯倉国民学校廃校。昭和28年港区立飯倉小学校復興。平成１６年閉校となる。

⑧聖坂小学校（明治４３年～昭和１９年３月）
　戦災により焼失し廃校となる。現在の南海小学校の校地

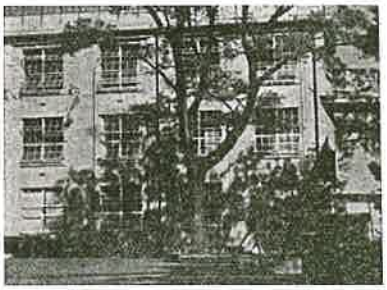
⑨芝浦小学校（昭和１７年～現在）芝浦３－１－２０
　芝浦国民学校として開校。昭和２２年港区立芝浦小学校と改称現１２学級３３１名

南海小学校

芝小学校

御田小学校

神明小学校


赤羽小学校

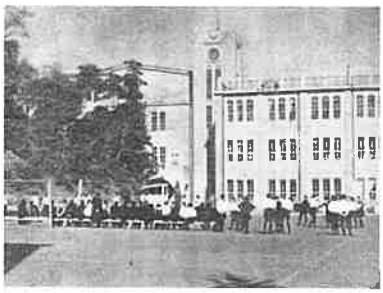
聖坂小学校

⑩三田中学校（平成１３年～現在）三田４－１３－１０
旧芝浜中学校と旧港中学校を統合（校舎は旧港中学校を使用）現６学級１８７名

⑪戸板学園（明治３５年～現在）芝２－２１－１７
戸板関子、芝公園に戸板裁縫学校設立（昭和２２年戸板女子専門学校とする）・大正５年三田高等女学校開設（昭和１２年戸板高等女学校と改称）・大正１２年三田四国町２番地に夜間制の三田博和女学校開設／大森に城南女学校創設（昭和７年城南高等家政女学校と改称）・大正１５年大森高等女学校開設（昭和２３年併合）・昭和２５年戸板短期大学発足・昭和４０年八王子校舎落成・平成５年中学高等学校用賀に移転・平成７年現在の地に短大三田新校舎完成・永きに渡り学び舎の在った地は北四国町東地区の再開発の為、今は中央三井信託銀行本店ビルとなっている。

⑫東京女子学園（明治３６年～現在）芝４－１－３０
高等女学校令による府下最初の4年制女学校として、私立東京高等女学校を開校。大正１１年校名を東京高等女学校と改称し、修業年限を5年とする。昭和２２年東京女子中・高等学校と改称。昭和２６年東京女子学園に改組。

⑬東京都立三田高校（大正１２年～現在）三田１－４－４６
三田高校は1923（大正12）年に東京府立第６高等女学校として誕生し、以来女子のナンバースクール中の名門校として歴史と伝統を誇ってきました。1950（昭和25）年に都立三田高等学校となり、男女共学制を取り入れ、現在に至っています。
三田定時制高校、昭和４年、東京府知事より東京府立第６高等女学校内に私立６高女夜学校設立認可。修業年限３カ年、生徒定員288名（６学級各48名）昭和１６年東京府立洗心女学校と校名を改称する。昭和１８年東京都立女子専門学校が併置される。昭和２５年東京都立三田高等学校と校名を改称し、男女共学制を実施する。都立三田高校定時制課程として現在に至る。


東京都立三田高校

⑭普蓮土学園（普蓮土女学校）三田４－１４－１６
1887年（明治20）アメリカ・フィラデルフィアのフレンド派（クエーカー）に属する婦人伝道会の人々により女子教育を目的として設立されました。

⑮三田英語学校（明治４０～戦災廃校？）北四国町２番地。
明治４０年正則英語学校芝分校として創立され、大正２年三田英語学校と改称独立。大正６年頃土屋文明が夜、三田英語学校の講師をして生計を立てていたこともある。現在跡地はファミリーマート。

⑯聖徳学園（昭和８年～現在）三田３－４－２８
聖徳家政学院と新井宿幼稚園を東京市大森区(現大田区)新井宿4丁目に創立、昭和２４年財団法人聖徳学園設立認可。港区芝通新町13（現三田校地）に、昭和２５年移転。昭和３４年港区芝二本榎（現高輪2丁目）に高輪寮（290㎡）を新築、三田校舎も増築。平成２年、聖徳大学を開学。聖徳学園短期大学を聖徳大学短期大学部と改称。また聖徳学園短期大学附属教員保母養成所は、聖徳大学幼児教育専門学校に改称。

⑰芝浦工業大学　（昭和２年～現在）芝浦３－９－１４
1927年、荏原郡大森3-2に東京高等工商学校設立（創立者 有元史郎）。1948年 芝浦高等学校（新制）設置し、翌1949年に芝浦工業大学を設置、工学部機械工学科・土木学科を開設。1966年には埼玉県大宮市に大宮校舎竣工し、２００６年現在では江東区豊洲の石川島播磨重工跡地にキャンパスを新設する計画である。

# 芝小学校と赤羽小学校

芝小学校（門前）

～地域に生き、生かされる芝小学校の子どもたち～

港区立芝小学校教頭　福永睦子

「行ってらっしゃい」
子どもたちが、全校遠足に出かける時、地域の方々が自然に手をふってくださる。4月に教頭に着任したばかりの私は、温かな心が通いあっている地域だなと感じた。

6月初め、本校の学校公開日、朝からプールサイドに多くの地域のつりの会の皆さんが集まってくださった。午前中は授業参観が中心だが、午後はプールでの「親子つり教室」の開催。１ヶ月前ぐらいから川釣りに行っては、たくさんの魚を運び、事前に親子で「つり竿を作る会」も行った。当日、子どもたちは手作りの釣り竿持参で登校。今日の午後が待ち遠しくてしかたがないといった表情。午後、いよいよつり教室開催。餌の付け方の指導から始まった。あっという間に釣った子、一時間もねばっても何も釣れない子。様々だが、大人も子どもも共に楽しめた一時であった。

校外でも多くの方々との関わりがある。9月には地域のお祭りが行われた。子ども神輿を担ぎ、盆踊りで地域の方々とみんなで踊り、地域との温かい関わりが感じられる。校長初め、教員も一緒に祭りに参加した。私たちが出かけていくと、地域の皆さんも子どもたちもうれしそうに迎えてくれる。子どもたちの明るい笑顔が可愛い。

このように、地域の方々に温かく接して頂きながら、子どもたちはすくすくと成長している。芝の子どもたちの素直さ、明るさはきっと皆さんに育てて頂いているのだなと感じる。これからもずっと、地域に生き、生かされる芝小学校の子どもたちでいてほしい。

| | |
|---|---|
| 明治12年　芝区新堀町３１番地に開校 | |
| 32Ｐ－②港区立芝小学校（港区芝２－２１－３） | 校長　　榮　健 |

～赤羽小学校～「やわらかい」目線で

港区立赤羽小学校　　教諭　横山 謙悟

毎日、子どもたちと一緒に生活をしていると、「今日遊べる？」「じゃあ〇〇公園ね。」という言葉をよく聞きます。でもよく聞いてみると、学校や自宅を中心とした、ごくごく限られた場所であることに気づきます。

子どもの目線から「地域」を眺めてみると、大人たちの言う「地域」とは若干、否、相当違うような感じがします。まだまだ行動範囲の狭い子どもたちにとっての「地域」とは、友だちの家、公園や児童館といった「遊び場」を主軸に形成されています。言い換えれば、友だちと楽しく遊ぶための基盤になるところ、それが「地域」になっているのではないでしょうか。その子どもたちの遊び場に、大人が精神的にも、実質的にも、積極的に関わることで、良い意味で昔ながらのコミュニティが形成されるのではないでしょうか

芝の「地域」には、今なお、大人・子どもの区別なく、それが残っています。我々大人が言う「地域」と、子どもたちとの結び付きが強く、子どもが安心して生活できる地域です。

赤羽小学校（門前）

赤羽小学校（庭の様子）

大正15年（１９２６）開校

32Ｐ－⑥港区立赤羽小学校（港区三田１－４－５２）　　校長　山越正秀

# 草野球少年団

妙法寺のご住職の話では、この北四国町で大正10年頃にはもう草野球少年団が存在し、活躍していたらしい。その後、関東大震災・太平洋戦争・戦後の混乱期を経て、生きる事に少しゆとりが出始めた戦後昭和25年頃、野球好きの大人たちが集り、野球チームギャランズ(Gallants:勇士達)を結成した。小山町では発起人の頭文字（Ｈ服部Ｏ大澤Ｋ高Ｓ佐々木）を取ったホックスクラブが誕生。その後、ベビーブームで生まれた子供達を遊ばせておくより「少年達に夢を」とホックスクラブの少年チーム(軟式野球)が誕生。主に赤羽小学校生徒中心に小山町や北四国の子供達を大澤氏が取りまとめ、服部氏が初代監督に就任しました。多い時には子供数が８０名を超えていた事も有る。昭和４０年にスポーツ少年団の設立があり、翌４１年、ホックスクラブが体育協会に加盟した時には、港区にスポーツ少年団は２７団体在り、８５７人の子供達が参加していた。我が港区スポーツ少年団ホックスクラブは昭和５７年には指導者１３人子供５５人を抱え、区で３番目に大きなクラブだった。

昭和４３年２代目監督は小泉守也氏、この時、小学校低学年チームと中学生チームが優勝し,港区ＪＳＣ相撲大会で国技館に小山町の松本さんと北四国町の鳥居さんが出場し優勝、昭和６１年には相撲で団体優勝をするなど子供達は野球と相撲両面で大活躍した。クラブに参加していた松村雅彦君はその後日立製作所社会人野球都市対抗のレギュラー選手として長年活躍し、鹿木さんの次男は後にヤクルトや中日からのオファーが来た優秀なメンバーであり、同じく安藤伸行君も６３年夏には、甲子園大会に常総学院の投手として出場し、その後本田技研社会人野球選手として活躍する等、クラブ卒業後も活躍する子供が多数いた。

この時期５９～６０年にかけての首都圏選抜毎日少年野球年鑑に、港区のスポーツ少年団チームが中学部１０・小学部２２団体載っており、港区は全国で一番大きな組織だった。６１年にはお母さんたちも港区ＪＳＣ婦人ソフトボール大会（村社・鎌倉・鳥居・木村・小泉・鹿木・大森参加）で第４位になる活躍をする等、ホックスクラブ少年野球の父兄も子供を支えながら、一緒になってスポーツを楽しんでいた。

春季大会・秋季大会・新人戦・緑陰大会と大きな試合が年に４回あり、芝グラウンドを練習場所に、埠頭グラウンド・北埠頭グラウンドで試合を行った。小泉監督のご自宅には数多くの入賞トロフィーや盾・賞状が飾られ、当時の活躍がしのばれた。その後、平成２年に監督が鹿木賢二氏に交代し、３代目監督のもと同年、中学生チームが再度誕生し、優勝２回と準優勝・平成３年には小学生高学年チームが優勝、毎日新聞社主催くりくり大会（西武球場）出場、中学生チーム３位優勝等、と引き続き活躍したが残念なことに平成５年に中学部が休部、平成７年小学部が休部。２１世紀に入った現況を見ると子供達の数が減り、その上、子供の塾通いで練習が出来なくなり、永い歴史ある少年野球は休眠中となったが、卒業生達が各自活躍し次世代を担う為、スタンバイ中である。

このチームで永くコーチを勤めた「終の住処を守る会」副代表世話人の大野氏は、自分の子供を含めたＯＢが社会人地域野球クラブで活躍し、埼玉県で優勝する等まだまだその火は消えず、現在進行形と語った。いつか息子達が又自分達の子供を集め少年野球チームを立ち上げてくれるのを楽しみにしているそうである。この北四国町会内のあちらこちらで、汚れた野球のユニホームを着、ヘルメットを被り、バットを手にした子供達が終ったばかりの野球試合の事を興奮して話しながら歩く姿を又いつか見たいものである。

草野球少年団

大澤恵之助さん

大野雅朗さん

小泉守也さん

お忙しい中、時間を割いて取材に協力して下さった大澤恵之助様・小泉守也様（小山町）、そして港区スポーツセンターの管野節子様に感謝致します。

# 昭和初期の遊び

正月ー凧上げ（現在の三田中学校の場所が空き地でそこでよくあげた）

竹馬（松の内が終わると松飾りを取り、その竹で竹馬をつくった）

羽根つき

けん玉

夏休みー蝉採り（特に増上寺の北おたまや付近は良く採れた）

一年中ーなわとび、お手玉（女の子はよくやっていた）

**芝プール**

芝園橋から増上寺の山門の方へ行った右手に芝プールがある。昔、神田美土代町のYMCAにあった室内プールは会員制で、芝以外に一般解放されていたのは二子玉川のプールしかなかった。しかし、玉川プールは川の水が引かれていたらしく、源五郎虫やミズスマシが泳いでいた。全盛期の早慶戦が行われていて、高石勝男や木村象雷というような名選手が活躍したプールである。町の子供達は年上の子供に連れられて、プールに遊びに行きました。そこで自然に泳ぎも覚えたそうです。

芝プール　昭和12年

大正時代の子供にとって、春日神社も恰好の遊び場だった様です。階段の手すりや石の崖は滑り台のかわりでした。春日神社からは慶応大学の敷地内にすぐ入ることができて、こわいもの知らずの男の子たちは崖からよく飛び下りていたそうです。

戦争中の頃

男の子は「水雷艦長」と言う遊びをよくしていたそうです。帽子の鍔を正面にすると艦長・後ろにすると水雷・横にすると水兵等と役柄の強い弱いがあり、籐八拳に似た遊びでした。この遊びは帽子をかぶらないとできない遊びだったので、よく遠足など、校庭で出発する間でしたものです。運動靴やボールが少なかったので裸足で遊んだり、何もなくてもできる遊びが多かったのです。

テレビなどはありませんので、紙芝居が人気でした。

学校から帰ると学校と同じ遊びや、学校で禁止されていたメンコやビー玉、剣玉、竹馬、模型飛行機作り、凧上げなんかをしていたそうです。ベーゴマは鉄がなかったので瀬戸物のコマでした。

### ベーゴマ

勝負台は桶や樽の上にござやシートをかぶせ、少し弛くたるませて縛ります。ひもをベーゴマ全体に巻き付けられれば準備完了です。「いち、にの、さん」で勝負台に力強く投げ入れ、台からはじき飛ばされた人は負けとなります。ベーゴマの種類には、円形のものや8角形のものなど様々ですが、低く重いものほど強くなるので、削ったり、ロウをくっつけたりなど、改造する場合もありました。

### メンコ

ジャンケンなどで先攻後攻を決め、後攻になった人は自分のメンコを地面に置きます。先攻の人は自分のメンコを、相手のメンコの側面、もしくはメンコ自体に強く打ちつけます。相手のメンコが裏がえれば、自分のものにすることができます。攻撃は、裏返しにできなくなるまで続けることができます。取られた方は、その都度に1枚ずつ出していかなければいけません。その他、タバコの空箱を折って造り市電にひいてもらって薄くしたりと工夫をしました。

### 石蹴り

地面に長方形の図を描き、数字などを使って順序立てした区画を作ります。最初の区画に手で石を投げ入れた後は、区画順に片足ケンケンをしながら、石を蹴り進めていきます。石が線からはみ出すことなく、無事ゴールまで蹴り進められたら終了です。誰が一番最初にゴールをするか、あるいはどれだけ上手に蹴り進められたかなどを競います。

### ビー玉

地面に星印などのビー玉を置く範囲を描き、その中に各自で数個のビー玉を置きます。順番を決め、各々が手元のビー玉（親玉）を中央のビー玉群めがけて弾きます。星印から弾き出せればそのビー玉を自分のものにできます。最終的に一番多くビー玉を取った人が勝ちです。ビー玉遊びは、非常に多くの遊び方があり、工夫次第でオリジナルの遊び方を考えることもできます。

# 春日神社

江戸時代の
春日神社の様子

鎮座地：港区三田２丁目１３番９号
祭神　：天児屋根命
由緒　：藤原氏全盛の天徳2年（平安時代・958年）武蔵国国司藤原正房卿任国の時に、藤原氏並びに皇室外戚の氏神である大和国春日大社第三殿に祀る天児屋根命（あめのこやねのみこと＝天照大神が天の岩戸にお隠れになった時、誠に美しい文句の祝詞を作られ、天照大神を外に誘い出したのがこの神様で、美文の祝詞から〝文学の神様〟として大変有名。）の御神霊を、目黒の三田に勧請鎮座しました。後に大田道灌が江戸城を築くと共に、東が海、西が山と言う地形の良さから港区三田の高台の地に遷座された。

上野に寛永寺が建立されると、春日神社を「三笠山神宮寺」と称して、寛永寺の僧侶がお宮を祀ることになり十一面観音を安置し、神仏共に益々繁栄し、江戸府唯一の春日社として代々徳川将軍の厚い信仰を集め、老若男女の参拝多く、江戸名物の一つとして徳川末期まで盛んであった。神社に残っている古文書の中に、例大祭は林大学守、老中牧野備前守を始め諸大名のご参詣があり神社では紫の幔幕を張り巡らし、その後接待は大変であったと記されています。又、藤原五摂家各家の信仰も厚く、つい最近まで各家の華麗がお参りにみえ、古式にのっとった奉納の儀式が続けられていたそうです。
戦禍により欅造りであった御社殿は焼失してしまったが昭和34年9月、戦後復興事業を成し遂げ、１千年祭を盛大に遂行した。

春日神社の歌

一、玉の宮居の南なる　三田に鎮り座せる
春日の神社とたとふるは　藤原の氏の祖先なり
二、綾にかしこき大神は　神代の昔皇孫の
命を輔け奉り　御國を守らせ給ひけり
三、千代萬代に極みなき　功績高き大神を
産砂神と敬ひて　學の業を励みなん
四、今年菊月九日は　大御祭の御典とて
御社近く拝みて　祝ふ今日こそ楽しけれ

春日神社　昭和13年

**珍しい女性宮司**

戦後の混乱がやっと収まりかけた昭和22年に國學院大學が神職を募集した際、150名の中で初めて6名の婦人神職が誕生しました。その第1号がこの春日神社の三笠季枝宮司でした。

H19年春日神社

## 春日亭

お宮に残る江戸時代の地図に、石段の下右手奥に〝春日亭〟と名付けられた建物があったことが判りました。５間間口の建物で、「常設・軍書講釈場」と書かれており、多分、軍記物の講談が語られていたのだろう。代室井馬琴が人気を博したとありますから、ここも町の人々で賑わったことでしょう。

## 春日神社の石段

神社の石段は江戸時代に、四国の大名から頂いた一段一段端から端まで継ぎ目の無い1本御影石で出来ているもので大変珍しかった。そのため昭和の頃には人々が観光バスで石段を見にきていたこともあった。

開運土鈴

満開の桜

・昭和８年、東京音頭が大変流行した。
春日神社の庭では四国町の人たちが踊る姿がよく見られた。

・神社の井戸の水は大変美味しくて、柄杓でくめる程満ちていたが、今では水位が低くなってしまったため見ることができない。

・北川歌磨呂の浮世絵にも三田春日神社として描かれている。

・春日神社では９月に大祭があります。
春日さんの氏子である四国町もこの時期町中が賑やかになります。

# 慶応義塾大学　三田キャンパス（１）

私たち北四国町の住民にとって慶応義塾のホームグラウンド・三田キャンパスは、地元商店が参加する「三田祭」や昔はカンテラ行列・早慶戦優勝パレードで馴染み深い大学です。三田キャンパスの歴史は私たちの歴史でも有ります。いま岩波書店刊行の『広辞苑』第4版で「三田」という言葉をひくと「①東京都港区の一地区。芝公園の南西に当たり、慶應義塾大学がある。」という説明とともに、「②慶応義塾大学の俗称」とあります。それほど三田は、慶應義塾の代名詞として離れ難いものになっています。北･西は古川、東は東京湾を境に、小山台･三田台と呼ばれる南北に伸びた台地上の三田キャンパスのあるエリアは、三田･田町･豊岡町･綱町･小山町･赤羽町･松本町･四国町などの町並みからなり、平成の今日に至るまで、義塾社中は勿論、住民や一般の人たちにも親しまれてきました。

三田周辺が大きく発展したのは江戸時代に入ってからで、幕府誕生によって三田台地北部や、南部の東西には武家屋敷が広がり、今の三田通りをはさんで町屋が形成されていきました。又、台地縁辺には春日神社･天祖神社などの神社が点在しました。明治維新以降、近代産業の発展と共に、これらの地域も変化し、慶応義塾がこの地に移転してきた明治４年（１８７１）には、大名屋敷の多くは旧大名･華族･政治家･富豪等の邸宅地になっており、海が見える眺望の開けた高台で自然が豊富に残り、昼間でも森閑とした場所だったそうです。

↑明治24年　慶應大学表門

↑明治24年　慶應大学から芝公園を望む

## 『慶応義塾の起源』

慶応義塾の創立者福澤諭吉は、天保5年末(1835.1.10)豊前国中津藩(大分県)奥平家の家臣福澤百助の次男として大坂堂島5丁目玉視江橋北詰中津藩蔵屋敷内の長屋で誕生し明治34年(1901)三田の慶応義塾構内の自邸で死去した。

慶応義塾の起源は、安政5年(1858)の冬、福澤諭吉が江戸築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内(現在の東京都中央区明石町、聖路加国際病院のあたり)に蘭学の「一小家塾」を開く。これが慶応義塾の起源で、時に福澤25歳。(いまはこの地に、昭和33年(1958)4月23日創立100年を記念して「慶応義塾発祥の地記念碑」が建てられている。)

塾は、文久元年(1861)に鉄砲洲から芝新銭座に移り、同3年また鉄砲洲へともどっていたのであるが、鉄砲洲一帯は外国人居留地に指定され、塾も移転の必要に迫られ、慶応3年(1867)、芝新銭座の有馬家中屋敷(現在の東京都港区浜松町1丁目)を手に入れ、翌慶応4年築地鉄砲洲の中津藩中屋敷から再び移転する。維新の大騒動の最中4月に、その塾舎の規模を大にした新校舎が完成すると、学塾の組織を新たにして、近代学塾としての基盤を築き、時の年号をとって「慶応義塾」と命名することになった。現在のその地には塾跡を示す記念碑が建っている。

慶応義塾が三田の現在地に移転したのは明治4年(1871)3月のことであった。慶応4年に鉄砲洲から折角移った新銭座の土地ではあったが、実際に住んでみると湿地でもありどこかに引き移りたいと考えるようになった。そこで手分けして適当な場所を物色した末、「三田にある島原藩の中屋敷が高燥の地で海浜の眺望(ちょうぼう)もよし、塾には適当だと衆論は一決した。たまたま明治新政府の発足に伴いそれまで諸国の大名が持っていた上屋敷、中屋敷、下屋敷の三つの内一つを残してあとは上地させる旨の取決めがなされたばかりであった。しかも好都合なことに東京府から福澤に対し、従来の巡邏(じゅんら)制度を改革し、西洋風のポリスの組織に改めるについて、諸外国の制度を調査してほしいとの依頼があったので、口にしないまでも一種の交換条件のような形で、三田の島原藩邸借用の件を依頼し、明治3年11月、東京府から令書(地所貸渡し建物払い下げ)が正式におりたのである。大名御殿2棟・長屋数棟の代金を納め、更に手を加えて移転が完了した。明治4年7月には廃藩置県が行われ、何百年の封建制度に終止符が打たれた。後、明治5年に至り、三田の地は東京府からの借地払い下げとなり手続きを済ませ完全に福澤諭吉の所有地となった。以後一世紀以上に渡り、この地で発展し多くの卒業生を送り出し、義塾の伝統や学風を生み出したキャンパスとなっています。

# 慶応義塾大学　三田キャンパス（２）

## 三田キャンパスに移転後の変化

慶応義塾移転後は、元の三田1・2丁目（現三田２丁目）に書店・飲食店・文具店・洋服店等ができ、学生街（商店街）として発展した。以後、三田通りに面した辺りは三田で最も賑やかな場所となる。又明治7年三田演説会を組織し、同8年演説会堂三田演説館を開館し日本に「演説」という風習を広める。明治23年1月、大学部を開設し、文学・理財学・法学の3科を置き日本における最初の私立の総合大学として発足。明治36年（1903）に三田綱町所在の蜂須賀家所有の地所を買い、3870余坪の綱町運動場を設けた。ここでは同年11月に、日本史上記念すべき早慶戦第１回戦が行われている。又、同年路面電車が開通。三田停留所の前には営業所が設置され、昭和44年（1969）の廃止まで都民や塾生の足として親しまれた。その後、早慶戦応援団のあまりの熱狂振りを危惧し、明治39年11月～大正14年秋に復活するまで、中絶していた。一方、田町周辺は明治42年国鉄が、翌年都営浅草線が通ったので工業地へと変化していった。当時の２大煙草メーカーの一つ村井兄弟商会（明治23年日本で初めて洋風両切り煙草［サンライズ］製造販売する）が設立され、そのころは東京の大建築物の一つに数えられていた煙草専売局の芝工場や森永の製菓工場が在ったのもこの辺りである。大正12年9月関東大震災が起こり、義塾の建物も多大の損害を受け、罹災者を校舎に収容していた為、10月中旬まで休校した。が、直ぐに塾債を発行して資金を集め、復旧に取り掛かった。昭和10年（1935）に入ってから慶応義塾の南端に新しく東西に広い切り通し道路が開通した。それ以前の三田通りは道幅が狭く、片側にはその半分位の幅の大溝が赤羽橋辺りまで走っていた。

## 戦後から今日に至るまで

三田は空襲に拠る被災地が比較的少なく、戦後直後の町並みは戦前と余り変わらなかった。だが、高度成長期には個人の大邸宅が次第に失われ、代わって外国公館やマンションが増えていった。同様に、三田通りや三田台町・寺町・綱町の一部を除いて、広い通りの両側はビル化（高層化）の傾向を辿り、三田山上からは海は臨めなくなった。そして現在は道路拡張のため、「幻の門」の周辺も昔の面影が失われてしまった。

# 戦時中の慶応義塾大学の歩み

昭和12年　慶応義塾特設防護団が組織される

昭和13年　文部省通達による集団勤労作業が始まる

昭和15年　5月肇国奉公勤労隊として宮城外苑整備作業

昭和16年　8月赤羽兵器廠での砲弾造りの勤労動員

9月全国に学校報国隊の結成・卒業年限の短縮

12月第2次世界大戦に突入し、緒戦の戦勝時には祝賀行進等も行われたが、戦局が悪化するや学生は学窓を離れて工場・農村へ生産増強の勤労奉仕に挺身し、卒業年限の短縮

昭和18年　10月16日「出陣学徒壮行」と銘打ち戦前最後の早慶戦挙行

11月20日には義塾で戦没塾員・塾生の合同慰霊祭を催す。

11月23日全塾的な出陣塾生壮行会を三田山上で開き、式後出陣。塾生は隊伍を組んで福澤諭吉の墓に詣でる。

12月学徒出陣で科系の学生は殆ど全部が戦線に動員され、残った塾生は長期の勤労動員で学校を離れ、幼稚舎生も集団疎開で、学園は空家と化した。防空の為建物には迷彩が施され、窓ガラスには爆風に拠る破片飛散防止のための紙が貼られ、薄暗くなった校舎の一部は、政府の指導で軍需工場に貸与されました。又、台地の地下には縦横に堅牢な防空壕が構築された。

昭和19年　教育に関する戦時措置方策により学校整備が行われ、大学文科系各部は入学定員を減少、高等部・商工学校・商業学校は生徒募集停止、在学生の卒業を待って廃校と決した。一方、大学付属医学部専門部・獣医畜産専門学校・工業学校が新設。

昭和20年　米軍機の本土空襲が激しくなるも医学部専門部に臨時特設科・工学部に冶金学科設置。同年5月25～26日の空襲により三田義塾は施設の大半を失う。

8月15日敗戦により，戦火は止んだが，全国大学中最大の罹災校となった義塾の前途は暗澹たるものであった。

昭和22年　戦禍の跡生々しい三田山上には創立90周年式典を挙げる建物も無く、焼跡の広場のテント張りの式壇に、私学としてはじめて天皇陛下をお迎えし、此れを出発点に復興は着々とその歩を進めていった。

取材にあたり、慶応義塾大学塾監局総務部広報担当の皆様に多大なる御協力を頂けました事を深く感謝致します。

# 東京都済生会中央病院

この北四国町は地の利も大変よく、町内に薬局１、歯科医は４、歩いてゆける距離に薬局はもとより各種医院は各々15以上、総合病院は済生会中央病院と国際医療福祉大学付属三田病院もあり、近くには古川橋病院・慈恵医大・芝病院・北里研究所病院・せんぽ病院・愛育病院・広尾病院・東大医研附属病院・慶応病院・聖路加病院が控えている。

中でもこの地域により密着しているのは、徒歩５分で行ける済生会（以下この表記とする）。北四国町の多くの人々が地域の歴史と共にあるこの病院で生まれ、現在も引き続き住民の健康を管理してもらっている。

昭和44年当時の建物

平成18年　旧民生病院跡地側

恩寵財団東京都済生会中央病院開設50周年誌／放射線科医長板津三良氏回顧録より当時の様子が伺える記録を此処に掲載させて頂いた

《有馬ヶ原の光景》三井会議所の前の原は、今は大きな保険局と赤羽小学校が建っているが、当時は有馬ヶ原と呼んで、塾学生達の憩いの場であった。そしてその三田通り側は急な崖となっており、その下、現在の三田高校（元の府立第6高女）の建っている所に黒ずんだ水を湛えた池があり、傾斜面に生えた古木や枯木が斜めに池上に懸り、蔓草が纏わり付きいつの時か入水自殺もあったとかで、池岸も汚れていて荒涼とした近付き難い処だった。その向こうに済生会中央病院が見えた。

《赤羽のマーケット》当時の病院の三田通りに面する所には、塀が在って、歩道との間に大きな溝があり、その岸辺には雑草が茂り、中央を汚水がチョロチョロ流れていた。流水下って、赤羽橋の交差点近くになると。溝上に板張りの桟橋が設けられ、その上にバラック建ての八百屋・魚屋等の食料品のマーケットが並んでいて、多くの客足を留めていた。

明治４４年　２月11日済生治療の勅語により４月・恩寵財団済生会協賛趣意書が出され、５月３０日に許可。伏見宮貞愛親王総裁/内閣総理大臣公爵桂太郎会長。

明治４５年　６月２６日大蔵省から当時の芝区、現在港区赤羽橋畔の大蔵省所管旧海軍造兵廠跡10.９55余坪国有地を無償貸付受ける。

８月　深川・本所・浅草・下谷・小石川・麹町診療所新設

大正　２年　桂会長薨去、徳川家達会長に推戴

大正　４年　4月6日竣工。10月31日北里柴三郎院長・伊丹繁副院長に就任。11月1日本院診療開始、病床180。12月1日各建物ほぼ落成、済生会芝病院と称す。

大正１２年　当院は事務所・病院・分院大破・他破損箇所が多かったが幸い火災を免れ、市内外に亘る多数の罹災傷病者の収容救護を急務としたので、直ちに破損の応急修理を施し建物を拡張、患者収容のため329床を加え、芝公園内などにも臨時救護を設けた

大正１３年　１月赤羽乳児院開院、巡回診療・看護の開始

昭和　２年　夜間診療参加

昭和　６年　臨時健康相談所開設。（現在の港区芝保険所の場所）

昭和１８年　10月巡回産婆開始（芝・京橋・日本橋・神田）

昭和２０年　病院建物は此れまでの度々の空襲には殆ど被害を受けなかったが、5月25日の夜の大空襲には、大型焼夷弾が落下して、病院建物の本館・外来病棟・2大病棟・その他総延べ数2,878,933坪が全焼し、病院の重要建物の2/3前後が戦災し、約300の病床も50を残すほどの大損害を被った。此の際、医師・看護婦等の患者救護と防火の状況について記録は殆ど無いがその人命救助の活動振りは語り草となっている。8月1日各科の大半を別院に移し診療開始。

昭和２５年　4月済生会の改組により東京都済生会に移管。

産院を合併し「東京都済生会中央病院」に改称。

昭和２６年　8月公的医療機関の指定を受け民間社会事業団体として出発。

昭和２７年　4月財団法人済生会を社会福祉法人恩寵財団済生会に組織変更。

昭和２８年　1月都立民生病院受託経営開始。結核病棟竣工

昭和４１年　病院最初の建物は済生会創立後、その後増改築したが、その間に関東大震災と空襲によって破損又は焼失して殆ど無くなり、僅かに残る物も建築後に若干の修築が加えられている。

５０周年事業として増改築開始

昭和４５年　増改築完成。地域に貢献する高機能病院として拡充・体制を整える。

平成　７年　東京都済生会看護専門学校開校。

平成　９年　訪問看護室が「済生会三田訪問看護ステーション」となる。

平成１４年　４月東京都立民生病院が廃止。その機能を継承し中央病院の１部となる。

平成１７年　４月旧民生病院跡に新棟オープン。

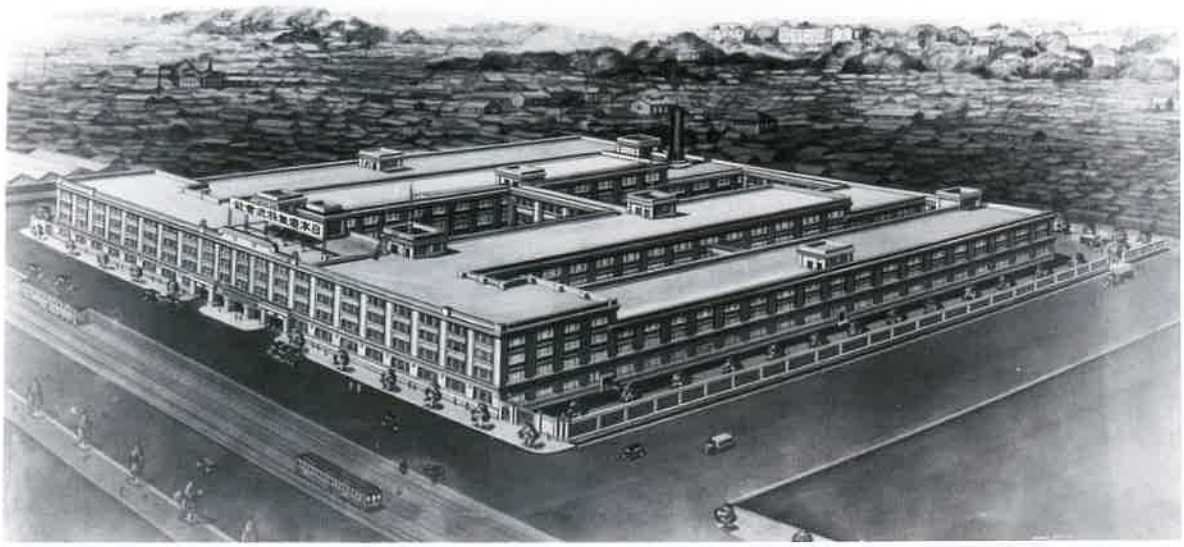
恩寵財団東京都済生会中央病院開設50周年誌と東京都済生会中央病院のホームページを参考に書かせて頂きました。資料を提供して下さいました済生会病院の石井正様のご協力に感謝致します。

# 株式会社　日本電気（ＮＥＣ）　（１）

１９６２年５月のＮＥＣ社内報［有線］（後のＮＥＣライフ）Ｎｏ145の「三田ところどころ」というコラムで―三田四国町由来―を取り上げていた。明治35年発行の『新撰東京名所図会』よりの記事を元に書かれた物である。

『位置』
三田四国町は新開の地にして、その地域ことに広く、東は新堀町、西応寺町、本芝入横町等に接し、西は三田同朋町を控えて、三田1丁目・2丁目と相対し、南は田町1丁目・2丁目等と隣り、北は松本町と新堀町の一部に臨み、道路縦横に連絡し、殊に三田の大路（今の三田通り）はその西を通じ、芝園橋の新路（会社の正面玄関に面した電車通り。明治以降旧島津邸を貫いて造られた）はその東部を貫けり。番地は旧邸地なるを以って多からず。1～33番地に至るに過ぎず。

『景況』
当町は、旧邸地なりしに因り、他の市街とはその趣を異にし、煙突処々に直立して、常に煤煙を噴くを以って、一見して工場の多きを知るを得。学校の数もまた一、二に止まらず
（と書いて次にそれらの名を列べてあるが、中に三吉電機工場というのが有り、これが我が日電の前身である。）
この文面から昔の北四国町の様子を感じ取って頂ければ幸いだが、次に我が地にある大企業ＮＥＣの変遷から、地域との関りと歴史を探ってみた。



１９４５年以前　本社・三田工場全景

現在、芝５－７－１に聳え立っているＮＥＣ。住民に親しまれていた赤レンガ時代には近隣の人々が利用できるように会社建物脇に湯の出る水場を用意する等の交流もあった。また、土地柄ＮＥＣの子会社も周りに多くあり、以前はＮＥＣに勤務する住民も多かった。今でも、スーパータワーで催されるコンサートに近隣住民を招待する等の交流が続いている。

１９２３年　関東大震災で崩壊した三田工場

１９２０年頃　三田工場内の交換機用ケーブル製造風景

１９４５年　本社と周辺の街並み

２００５年　ＮＥＣスーパータワー

ＮＥＣの資料に関し、広報部の方々に多大なるご協力を頂きました事を深く感謝致します。

# 株式会社　日本電気（ＮＥＣ）　（２）

（明治１８年）

１８８５　通称「薩摩原」と呼ばれた三田四国町に三吉電機工場（三吉正一設立）は敷地３５００㎡･建物延べ面積２６００㎡の日本最大の工場を構えていた。

１８９８　岩垂邦彦、前田武四郎の協力を得て三吉電機工場の建物や機械等を原形のまま買収し、［日本電気合資会社］を９月１日発足

１８９９　ＷＥ（ウェスタン･エレクトリック）社との共同事業の体制が整い、７月１７日、電話機などの製造・販売を行う日本初の外国資本との合弁会社［日本電気株式会社］設立・岩垂邦彦、専務取締役（代表者）就任

１９００　旧工場の東南約１００ｍに位置する、三井一門が所有する三田四国町の土地約５８００㎡取得。その後１０年間で３回に亘って隣接する土地を取得し１６２００㎡、（１９１１･明治４４）その合計面積約２２０００㎡現在の本社敷地となる（現在ＮＥＣスーパータワーの地）

１９０２　４月、第１工場･１２月、第２工場Ｂ完成　（赤レンガ造り、スレートぶきの１階ないし２階建て）

１９０６～

１９１１　第２工場Ｃ及びＡ（Ａ：政府の第２次電話拡張計画に対応した増産体制の中心工場･２階建て煉瓦造り）、第３工場：１階煉瓦造りの当時としては画期的な鋸歯状屋根を持つ工場、第４工場：同様に鋸歯状屋根の工場だったが、同時に建てられた直径２ｍ高さ４０ｍの耐震性鋼鉄煙突が人々を驚かす、第５工場が相次いで建設

（大正２年）

１９１３　鉄筋コンクリート建の新工場完成

１９１４～

１９１７　第１次大戦ブーム　昼夜二交替制のフル操業

１９２２　第９及び第１１工場完成、これにより創業以来の工場建設計画完了

１９２３　９月１日正午前、マグニチュード７．９の関東大震災が起こる。その日は、たまたま日本電気合資会社の設立２５周年記念日だった。完成したばかりの第９・第１１・第７・第８工場（いずれも鉄筋コンクリート３階建て）が全半壊。社員１０５人が圧死、多数が負傷した。倒壊した工場では、まず３階が崩れ、ついで２階も崩れ落ちた。後に出来た近代的鉄筋コンクリート建の工場が大きな被害を被ったにもかかわらず、それより以前に建てられた赤レンガ建築の工場はわずかな被害を受けただけで殆ど無傷といってよい状態で残った。
工場は震災前の床面積約２７５００㎡が１４３５０㎡に減ってしまったが、倒壊を免れた工場にも機械設備の破損など様々な損傷はあるものの、火災が発生しなかったので、９月８日には営業を再開、１０月１日からは平常業務に復帰、倒壊工場の作業は近くの芝浦木工場に移し急場をしのいだ。

１９２４　三田工場について全面的移転を主張する声もあったが、岩垂専務は倒壊跡に再建することを決定。７月建設計画を作成（鉄筋コンクリート３階建ての正方形工場を７期に分けて建設する。総面積は約４１０００㎡、それを１１の工場に仕切る）

（昭和５年）

１９２５～

１９３０　２月までの間に第１期工事から第４期工事まで完成。新工場には防火設備として、当時としてはあまり例のないスプリンクラーが取り付けられていた。世界恐慌（昭和恐慌）が起こり、工事は一時中断。

# 歴史的変遷

１９３２　ＩＳＥ社（ＷＥ社が１９１８に海外事業を統括するＩＷＥ社設立、以降親会社となるが、ＩＴＴに買収され、ＩＳＥとなったので引き続き統括下に入る）、日本電気の経営を住友に委託。住友電線製造所技師長・志田文雄が実質的な経営の中心となる専務に就任した。

１９３５～

１９３８　第５期～第７期の工事完了。建物総面積約４５０００㎡の大工場完成。４月専務・志田急逝の為７月に逓信省工務局長・梶井剛が専務に就任。

１９３９　９月第二次世界大戦はじまる。４１年太平洋戦争始まる。

１９４３　２月社名を「住友通信工業株式会社」と変更。予想される空襲の被害を極力少なくする為工場分散に着手。４４年以降米軍機の東京空襲熾烈化で政府の疎開命令に従い工場の全面的な地方疎開が始まる。

１９４４　「軍需会社法」にもとづき、１月に三田・玉川・岡山・大津・上野が軍需工場に指定され、続いて４月芝浦・深川・高崎・瀬戸・生田が追加指定され全工場が軍需工場として統制を受ける。

１９４５　３月の東京大空襲で、上野・深川の工場などを焼失、以降玉川・岡山・仙台・青森などの工場・施設が次々空襲の被害を受けるが、不思議と都心の三田工場は殆ど被害らしい被害は受けなかった。終戦時従業員２８０００人（内、新規徴用工・学徒・女子挺身隊５０００人）。１１月３０日財閥解体の指令に基づき社名を「日本電気株式会社」に復帰。同月、三田労働組合結成。

１９４６　佐伯長生が社長に就任、翌４７年渡辺斌衡が社長に就任。

１９４９　工場閉鎖、人員整理を含む企業再建整備計画策定。三田「製造所」を「事業部」に改組。

１９５０　ISE社との技術提携が復活、翌５１年には資本提携が復活した。

１９５１～

１９５２　当時、三田事業部は電話機・自動交換機・手動交換機などの量産を行ない、売上高でも日本電気の主力工場の地位を占めていた。このため、三田事業部では生産管理、特に工程管理の改善に力を入れ、日本電気における工場管理の近代化に大きな転機をもたらした。

１９５３　６月ラジオ事業部を分離し、「新日本電気株式会社」を設立。６３年には、商品事業部とテレビ受像機専門の子会社である溝口製作所を吸収合併。

１９５６　８月従来の地域別組織を改め同一製品分野の技術部門と製造部門を統合、製品分野別に５つの「工業部」に再編成する。この体制下、工業部長に各製品分野における技術開発と生産に関する権限が大幅に委譲された。三田には「有線工業部」が置かれ、翌５７年には「部品工業部」が分離独立し、各工業部の必要とする通信機部品を製造することになった。

１９６１　４月再度根本的な経営体制の見直しが必要とされ、「事業部制」の導入に至る。事業部制のもとでは、技術・製造・営業など事業経営全般について幅広い裁量権を与えられた。

１９６４　小林宏治が社長就任。翌６５年５月全社的な組織再編成・日本電気の組織はその後、事業の発展に伴ない、膨張しながら幾多の修正・変更が加えられるが、このときつくられたものが原型であり出発点となっている。

１９６８　三田工場にも公害防止施設を設置。７０年には公害防止環境管理部を設置。

１９７３　本社を三田から森永プラザビルに移転

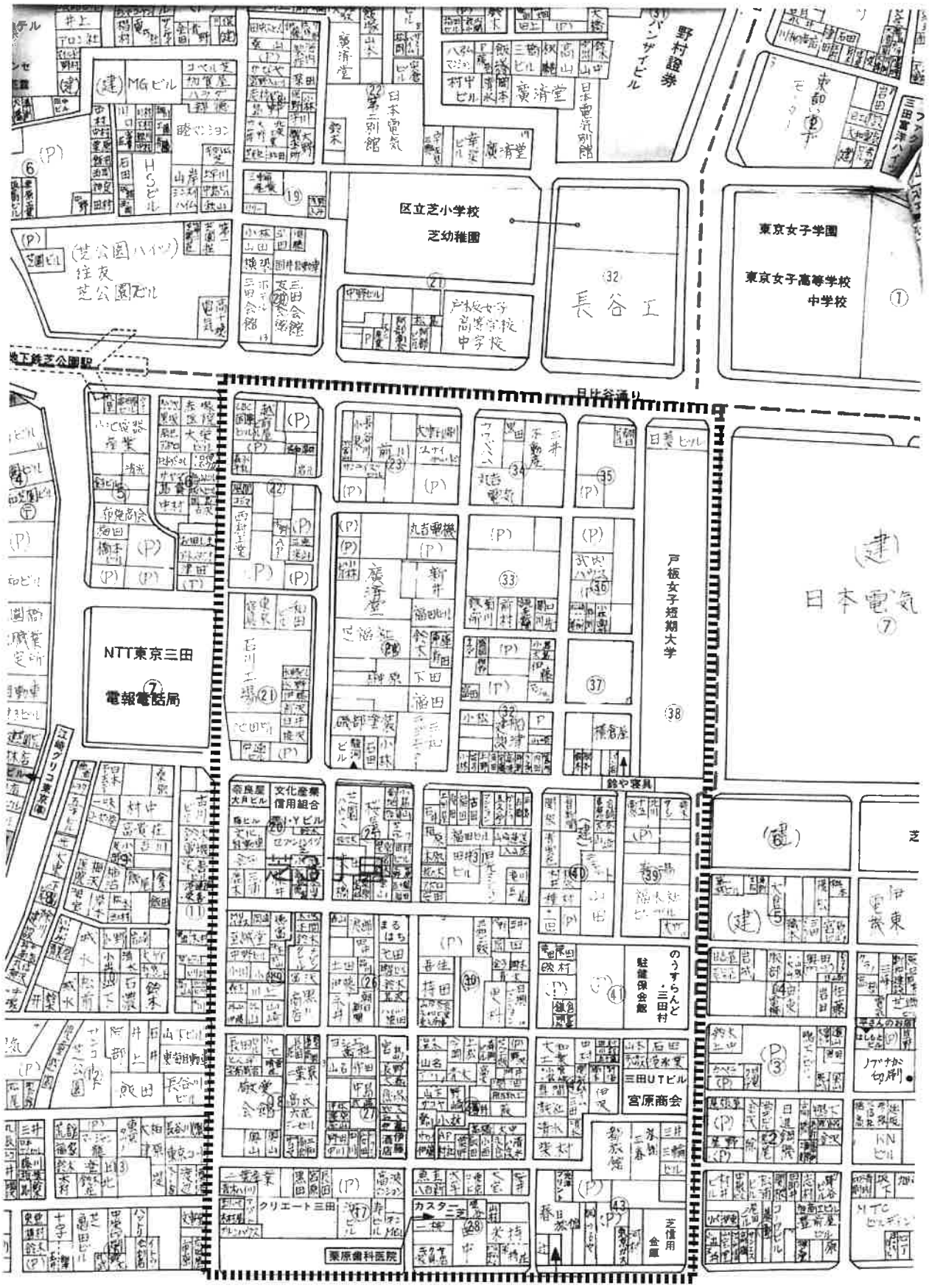
（平成２年）

１９９０　三田に新本社ビル（ＮＥＣスーパータワー）竣工・移転

以上、平成１２年７月７日発行「ＮＥＣの１００年」を参考にさせていただきました。

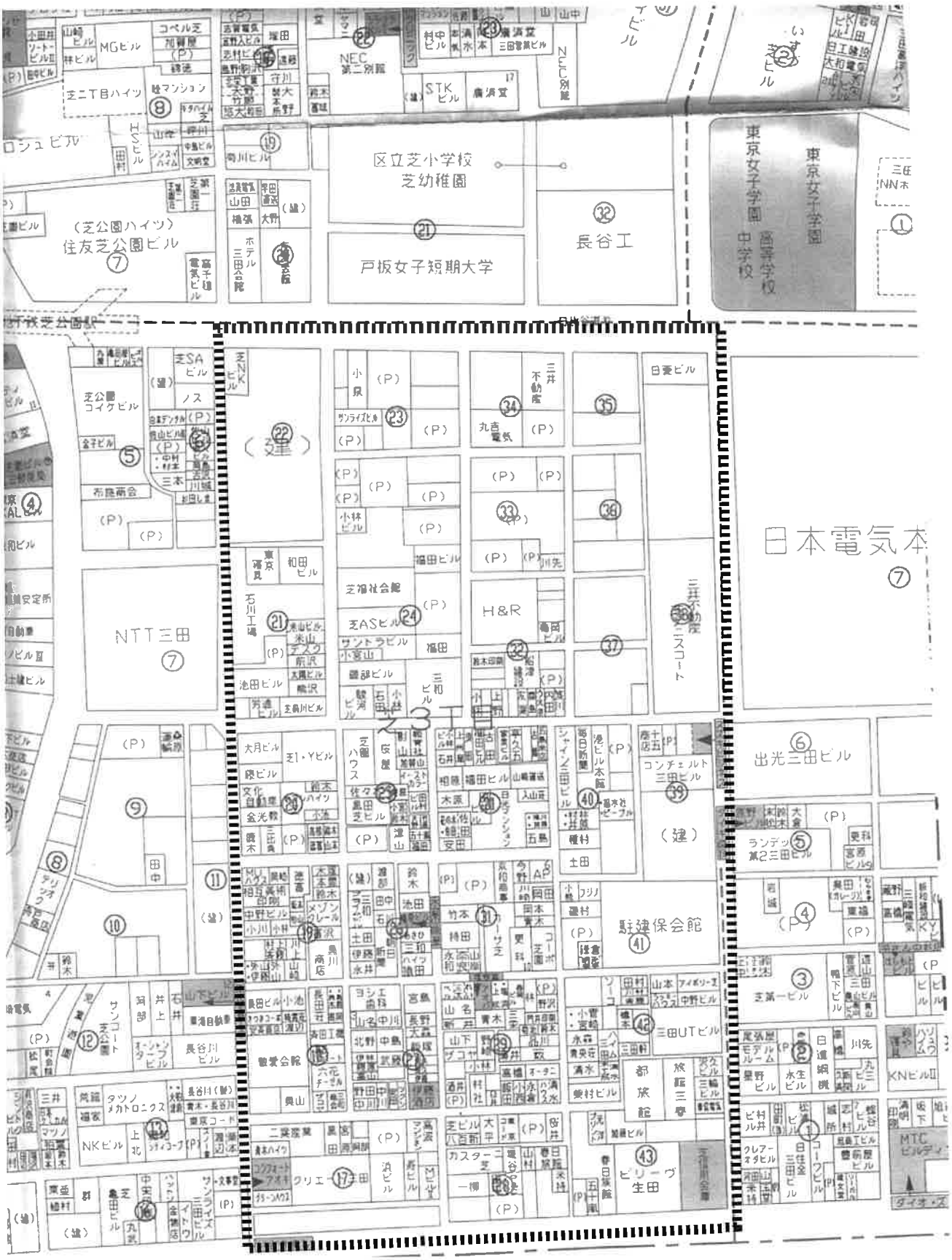
# 住宅地図での変遷（１）

昭和59年

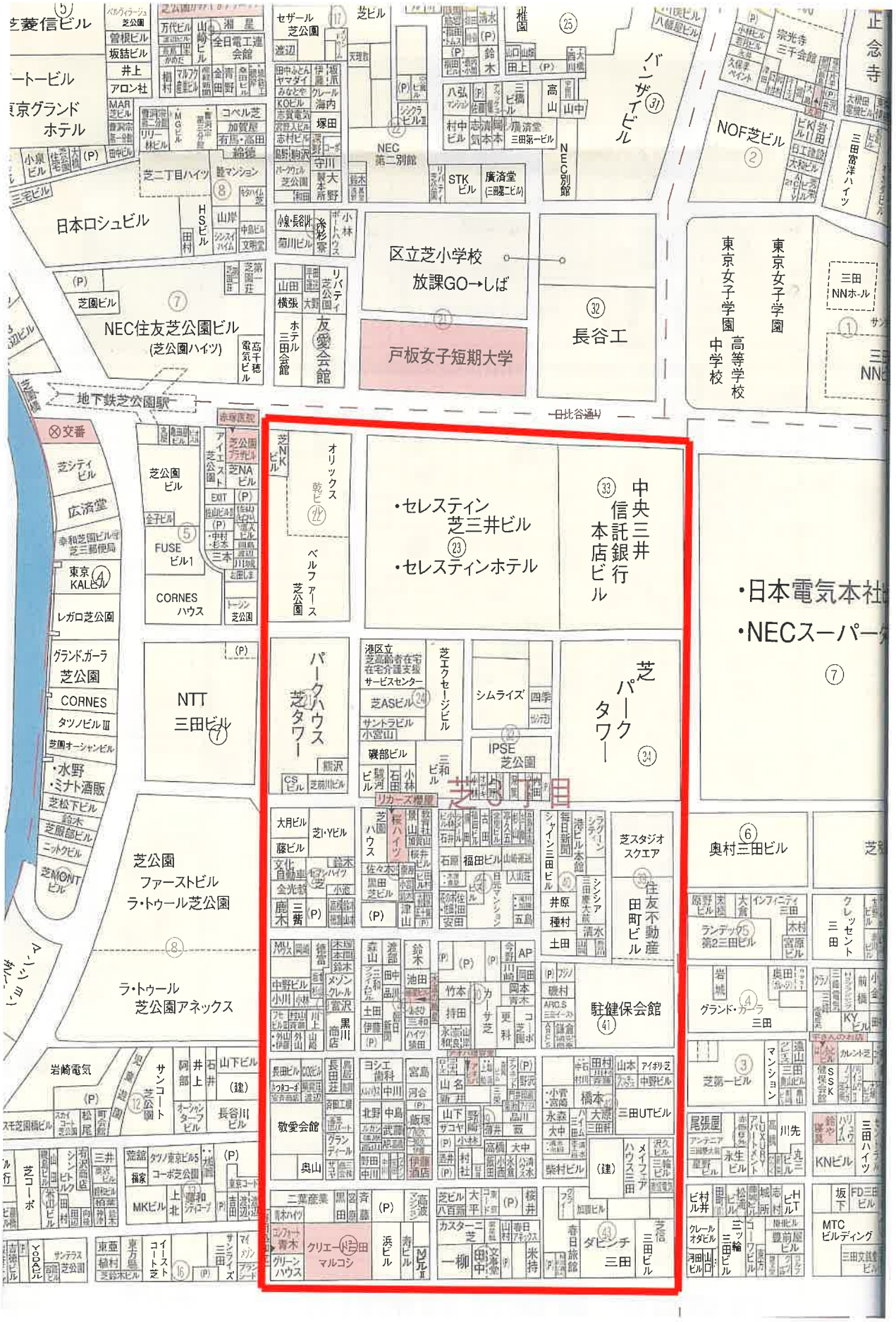



平成5年頃東地区辺りに空き地が目立ってくる

# 住宅地図での変遷（２）




平成9年 東地区都市計画決定の頃


東京グランドホテル
日本ロシュビル
NEC住友芝公園ビル
(芝公園ハイツ)
地下鉄芝公園駅
区立芝小学校
放課GO→しば
戸板女子短期大学
長谷工
東京女子学園
東京女子学園中学校高等学校
NOF芝ビル
バーンザイビル
NEC第二別館
NEC別館
日比谷通り
芝NKビル
オリックス乾ビル
ベルファース芝公園
・セレスティン芝三井ビル
・セレスティンホテル
中央三井信託銀行本店ビル
・日本電気本社
・NECスーパー
パークハウス芝タワー
芝パークタワー
シムライズ
IPSE芝公園
芝エクセージビル
芝ASビル
三和ビル
芝3丁目
NTT三田ビル
芝公園ファーストビル
ラ・トゥール芝公園
ラ・トゥール芝公園アネックス
CORNES
CORNES ハウス
FUSE ビル1
レガロ芝公園
グランド.ガーラ芝公園
芝シティビル
広済堂
奥村三田ビル
住友不動産田町ビル
芝スタジオスクエア
駐健保会館
シャイン三田ビル
毎日新聞
福田ビル
芝園ハウス
桜ハイツ
芝・Yビル
大月ビル
藤ビル
文化自動車
全光社
鹿木
三酢
敬愛会館
クリエーター青木
マルコシ
グリーンハウス
浜ビル
青ビル
ダビンチ三田
三田ビル
三田UTビル
芝信
岩崎電気
サンコート芝公園
長谷川ビル
芝第一ビル
グランド・ガーラ三田
KNビル
MTCビルディング
三田ハイツ
三田支該ビル

平成18年

# 北四国町の昔と今の風景

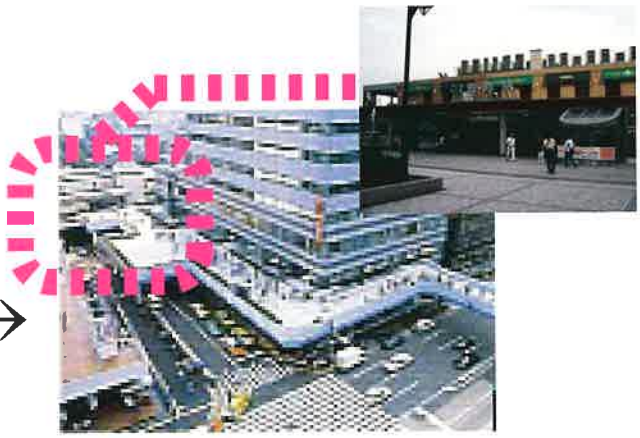
昭和５年頃
虫売り（鳴く虫を売って歩く）が
蔵の前に来ている。
奥に見えるのが材木屋さんの蔵。

→

平成18年
まわりは変わってしまったが
蔵は残っている。

昭和初期の田町駅前

→



平成18年の田町駅

昭和初期のいろは横丁

→

平成18年のいろは横丁

昭和初期のまるはち前

→

平成18年のまるはち前

昭和初期のアライ前

→

平成18年のアライ前

昭和初期　路面電車の通る三田通り

→

平成18年の三田通り

# ０６：終の住処・北四国町

我が町、北四国町には私達「終の住処を守る会」の他に、永い歴史ある「北四国町会」と「芝寿会」が在ります。この２つの会は現在も盛んに活動しており、此処にその歴史と活動を紹介します。北四国町会は勿論戦前から在ったのですが、その詳しい資料は残念ながら残っていませんので、小松富美子さんの記憶を元に戦後の町会長、芝寿会会長のお名前をお聞きしました。港区の自治団体名簿には昭和３７年からの町会代表者（町会長）しか記載がありません。北四国町会は平成19年、町会会館取得のため法人化しました。

## 北四国町会

名簿以前の代表者・三輪和作氏と内海武雄氏（以降敬称省略）

| | |
|---|---|
| 昭和37～40年 | 奈良弘文 |
| 昭和40～43年 | 宮原達夫 |
| 昭和44～53年 | 鎌田秋蔵 |
| 昭和53～55年 | 鈴木唯二 |
| 昭和55～59年 | 鈴木重信 |
| 昭和59～63年 | 吉川輝之 |
| 昭和63～平成3年 | 宮原達夫 |
| 平成3～15年 | 山名茂登 |
| 平成15～21年 | 杉山光敬 |

現北四国町会会長　杉山光敬

≪町会行事≫ 拠点・町会会館「四季」芝３－３２－８

4月　入学児童へお祝品贈呈
　　交通安全運動協力
　　定期総会・懇親会
5月　バスレク
6月　町ぐるみ運動会
　　薬剤散布　町会懇談会
7月　ラジオ体操
8月　夏休み納涼行事　子供バスレク
9月　敬老金贈呈　春日神社祭礼
10月　文化祭
11月　映画会・茶話会
12月　夜警～2月迄
　　餅つき大会
1月　新年あいさつ交歓会
2月　映画会・茶話会
3月　中学卒業生にお祝品贈呈
通年　・町内清掃／町内パトロール

12月　餅つき大会

# 芝寿会

戦前、一種の社交場となっていた「櫻湯」という風呂屋で、気の合う連中が集って「いろは会」と銘打って旅行会を行っていた。其れが、老人会に発展していったらしい。当時の若い衆がこれに対抗して「ほへと会」を作り、現在はこのメンバーが芝寿会の中心である。

芝寿会が組織としてハッキリした形をとってくるのは昭和48年からです。それ以前、存在はしていたのですが、町会と一体になっていたようです。その後、老人会に区から補助金が下り、活動を支援してくれるようになったので、活動も活発になり、キチンとした形態をとるようになりました。

≪歴代の会長（昭和48年～）≫

| | |
|---|---|
| 昭和48年～ | 松崎太茂知 |
| 不明 | 猿田正作 |
| 昭和58年～平成15年 | 野崎秀夫 |
| 平成15年～16年 | 知久良三 |
| 平成17年～ | 田村文夫 |

現芝寿会会長　田村文夫

≪芝寿会行事≫

| | |
|---|---|
| 4月 | 芝寿会役員会 |
| 5月 | 芝寿会総会 |
| | 港区老連クラブ総会 |
| 6月 | 児童祭りへの参加 |
| 7月 | 写生会 |
| 8月 | 港区老連カラオケ大会出場 |
| 9月 | 秋の交通安全運動に伴なう連絡会 |
| | 日帰りバスレク |
| | 敬老のお祝品贈呈 |
| | 長寿を祝う集い（75歳以上） |
| 10月 | ほのぼの作品展（文化祭）参加 |
| 11月 | 芸能大会出場 |
| 1月 | 芝寿会成田山初詣 |
| | 芝寿会新年会 |
| | 港区老連新年会 |
| 2月 | 保育園児と芝寿会員との交流会 |
| 3月 | 芝寿会より90歳以上の方へお祝い品贈呈 |

1月　成田山初詣の集合写真

# まちの顔とまちの声と（１）

## 002.　三田木村屋

元は麻布に在ったが、関東大震災でこの地へ来た。
現在３代目、今まで培ってきた古き良き交流をこれからも残していきたい。

## 003.　寿司処　和文

Ｈ１４．９．２４にオープン。
今まで以上に住民の交流ある町になっていって貰いたい。

## 005.　㈲寿米菓本舗

昭和33年頃より現在の場所にて商いを行う。
広尾から芝へと移り住んできたが、生業は変わらず、今後も商売に励みたいと思う。

## 006.　浜野無線㈱

明治２６年浜野茂兵衛（金之助）が米国製トラック１０台前後を保有し運送業を営む。大正１０年頃、後継の市太郎は関東大震災復旧に尽力し莫大な利益を上げる。三田１－１５が手狭となり、大正１３年に四国町２－３に移転。大正１４年三田の跡地でラジオ商開業、これが浜野無線の前身である。北四国町でも電気店を開き地元の電気屋さんとして住民に親しまれる。

## 014.　㈱長田商店

燃料備長炭販売であり、終戦後父親が此処で始めた２代目である。
この地の古い街並み人情が好き。

## 021.　㈱黒川商店

漬物清造卸であり、昭和２６年創業２代目。

便利もいいし住み慣れた穏やかな良い町。

## 043. 芝地域包括支援センター

・・・ようこそ・・・笑顔あふれるセンターへ
はじめまして！平成１８年４月より前任の社会福祉法人響会より、引継ぎをいたしました、医療法人社団湖聖会です。【自らが受けたい医療と福祉の創造】を理念にこの地で根を張り続けたいと願っております。お気軽におこしくださいませ。
スタッフ一同お待ちしております。

## 050. ㈱櫻屋

昭和８年からこの地で酒屋を営み３代目。親戚も直ぐ近くに居り、此処は愛着のある町。数年前にビルにして店構えも明るく、若主人がの笑顔が爽やかで、店にはお客様の姿が何時もみられる。

## 054. ドライクリーニングまるはち

昭和の初期から芝へ来て以来この地で営業し、今も家族と共に住み暮らしている。町の変遷を見てきたが、まだまだ此処には昔の良さが残っていて人情味が在り、私にとって愛着深い処です。これからもこの町と共に在り続けたい。提供した写真は昭和５年の店前、当時自分（義一さん）は４歳だった。

## 056. ㈲あさひ薬品

戦後自宅が４２番地に店が２５番地に有ったが、昭和５３年に今の所に移り、現在も地元に密着した薬屋さんとして親しまれている。急の病気で困った時あさひ薬局の薬でホッとした経験をした住民は少なくない。

## 058. てんぷら屋猿田

この地で約７５年になる。２代目。三の橋から昭和5年に芝の今の地に移った。人がどんどん変わってしまって淋しい。平成１８年４月、諸事情により店じまいする.

## 059. 朝日ニュースステーション

芝４丁目から昭和３３年に移転してきた。営業地域は三田１、２、芝一帯、芝浦、港南、海岸まで。地域あっての商売、もっと沢山人が住み、町が発展していく事を願っている。４～５年前の夏から町内の子供達にカブトムシを採ってきて提供している。最近は採集地も開発で捕れる数が少なくなり、自分達が見つけた場所を業者が追いかけてくるようになり、探すのも大変に成った。

# まちの顔とまちの声と（２）

## 062. ㈲宮嶋畳店

参勤交代の時に付いて来て、それ以来、芝に住んでいる江戸時代から続く畳屋さん８代目。この町は古い人が住んでいる町、皆で仲良く暮らしてゆきたい。

## 064. 伊藤酒店

三多摩地方より来て、戦前は１７番地（今の八百新前の処）で酒屋を営んでいたが、戦後現在の地に移る。明るい奥さんと働き者のご主人で昼は弁当の販売も手がけ、夜は地元住民や会社員の憩いの場になっており、ビルに囲まれ不便になった地元になくてはならない店になっている。

## 065. 安田精米店

戦前から居住し此処で生まれた３代目。

此処でず～と暮らしてゆきたい。

## 067. 中川理髪店

芝で生まれ育地、理髪店を営む３代目。
今の地に来たのは昭和２３年から。
先人達の残した芝の良い所を伝えていきたい。
平成19年５月閉店

## 068. ㈱八百新

此処で家族で商売を始めて約５５年、２代目。
時々で変化してゆこうとも、昔からの下町っぽさ、この雰囲気を残していきたい。

## 070. ㈱万丈ヴィスプーン

万丈はフォトフレーム・額縁・アルバム製品・インテリア・ミニチュア商品を扱っている昭和４０年に大阪で創立された会社です。此処はその東京営業所。1980年芝浦から1995年三田２丁目へ、そして2000年に芝に移転。アンテナショップとしての小売店でもあります。

## 075. ㈱文事堂

芝公園の方で創業しこの地へ移って約３０年が過ぎた。古い時代の歴史の残る好い所を大事にして地域の人達と仲良く住んでいきたい。
H18年11月芝浦に移転。

## 076. 酒井商店／㈲SRH

健康食品・自然食品・化粧品の製造と販売の会社。より良い商品を提供し、一人でも多くの方々に喜んで頂きたいをモットーに芝で事業をはじめました。芝３丁目は隣近所の付き合いがあり、旧き良き時代の人情が残るホッとする町、そんなこの地で仕事を続けてゆきたいと思います。

## 084. カフェ・ド・ゴールド

芝で３代目に当たり、此処で店を開いて８年目。

下町の風情が残る人情ある町が好き。

## 097. ㈲福田工務店

昭和２４年父親の代に群馬から芝５丁目に越してきた。その後２６年に今のところに居を構え、本業の傍ら父親は町会役員をず～と努めた。２代目として地元で仕事を続けて早、娘や孫に囲まれる歳になった。何時までもこの地で平穏に暮らしてゆきたいと母や妻と話している。

## 121. 宝来軒

店を構えて約２１年。
親しみのある四国町の中でこれからも地域に根付いた店として店を続けていきたい。
H18年10月この地を去る。

## 125. 泰信電気㈱

三田２より拡幅で以前より会社倉庫のあるこの地へ本社移転して約１０年。
親しみやすい此処の雰囲気が好きです。

# まちの顔とまちの声と（３）

## 04. 二葉産業㈱

本社　　：東京都港区芝３－１７－４
代表者　：代表取締役　小林宗朗
創業　　：大正８年８月
事業内容：プラスチック関連の創業商社

大正８年芝区琴平町において、吉村次八、東京二葉組の名称をもって電気器具の販売を開始。大正１５年に現在地に移転し、前記事業を継続。昭和１１年には資本金１０万円をもって,㈱東京二葉組を設立。昭和１９年には商号を現在の二葉産業株式会社に変更して三代目となる。現在の敷地は日本ペイント発祥の土地。

『北四国町への思い』
此処はもともと商業地域だが、時代と共に人も移り変わり昔の隣組の雰囲気が無くなり、人間同士のつながりも希薄に成りつつある。が、いつまでも古き良きものを残しながら皆が安心して暮らせる町であって欲しい。自分達が自由にのびのびと暮らせている、地べたに足をつけて住んでいける事は１番の贅沢だ。

二葉産業外観㈱

代表取締役社長　小林宗朗

## 74. ㈱東京コード

本社　　：東京都港区芝３－１３－９
加工部　：東京都港区芝３－２８－５
代表者　：代表取締役　大野　義之助
創業　　：昭和３０年２月
事業内容：各種電線・コード等の設計・製造・販売

昭和３０年に東京都港区新橋１－６にて弱電ビニール電線の卸販売として資本金５０万円で東京コード販売株式会社を設立する。昭和３４年に営業地拡大の為、本社を浜松町４－１に移転。昭和４１年には、倉庫を芝３－１３－９に建築する。昭和４６年に本社の所在地を現在の芝３－１３－９に移転登記を行う。昭和５１年、設立２０周年を以って社名を株式会社東京コードに商号変更する。

『北四国町への思い』
元は金杉橋に居住し草履屋だったが、事業を起こし４０年、この地へ移って約１５年程。
町は変わってゆくものだが、古き良き雰囲気が残っているのを大切にしたい。

㈱東京コード外観

代表取締役社長　大野義之助

# 12. 宗教法人 心〇界教団本部

事業家として活躍していた開祖石井〇山師は、昭和７年２月２４日心霊界立教時には麻布に居を構えていたが、昭和１０年ごろ現在の芝３丁目に移った。戦災で建物が焼け後に、木造黒塗りの２階建ての建物となったが、昭和５１年、現在の敬愛会館を建てた。丁度会館が出来た当時には町会に会館が無かった為、集会などで部屋を使わせて頂くなど住民との交流が深かった。住民の中には開祖〇山命様を知っている年配者も多く、身近な教団として地元に溶け込んでいる。今はもう心〇界石井宗家の若き３代目が総長となって教団を率いている。この教えの下に学ぶ会員約１６万人以上、創立８年後には海外までもの発展をみている。

本教団は心霊界という名称の下に創立、心霊界はその名のごとく宇宙万物の心を説き、世界の宗教も我が白道の中に抱擁し融合する、宇宙万物と神霊実在の根本を極め其処に人間本来の生き方と条件を悟らせるべく教え導いている教団です。

芝３－１８－２１に本聴（本部）として敬愛会館を置き，伊勢原に〇山神社を置く。

心〇界教団外観

心〇界教団代表役員　鳥居英夫

# 22. 宗教法人 金光教御田教会

今から190年ほど前の1814年（文化１１年）9月29日夕刻、現在の岡山県浅口郡金光町占見（うらみ）の農家に教祖誕生。1859（安政６）年10月21日、神様から「難儀をしている人たちを取次ぎ助けてほしい」というお頼み、「立教神伝」（りっきょうしんでん）があり、金光教の始まりとなった。

金光教は、「取次（とりつぎ）」を通して、神と人、人と人、人と万物が「あいよかけよ」で共に助かり立ち行く世界の実現をめざす宗教である。首都圏内には１００余の教会があります。芝３には御田教会が２０－２に在り、教会は、それぞれの地域にあって、天地金乃神様の願いを実現していく拠点である。全国には金光教の教会が約１６００箇所あります。

日本だけでなく、アメリカ本土に１０教会、ハワイに６教会、カナダに２教会、ブラジルに５教会が活動をおこなっており、また韓国とパラグアイに布教拠点が設置されるなど、金光教は世界に広がっています

金光教芝教会外観

金光教　金子　恵

# 懐かしい風景

大洋木工所・大石さん（26-4）

北四国町から移り住んでいった方達やその名称を変更された方達がいます。大洋木工所／在宅介護支援センター／十五商会／都旅館／加賀山ステンレスの５件はこの芝っ子の取材を始めた時には、元気に営業しておられました。この懐かしい風景は、みなさんの記憶の中に残っていることでしょう。

響会・芝高齢者住宅在宅
介護支援センター（24-5）

十五商会（39-5）

都旅館（43-7）

加賀山ステンレス（25-6）

昭和40年代　春日神社大祭

昭和40年代　町内会旅行

昭和40年代　大祭での御神輿

昭和50年代　北四国町会祭礼委員

昭和40年代　芝寿会旅行

昭和40年代　地域運動会

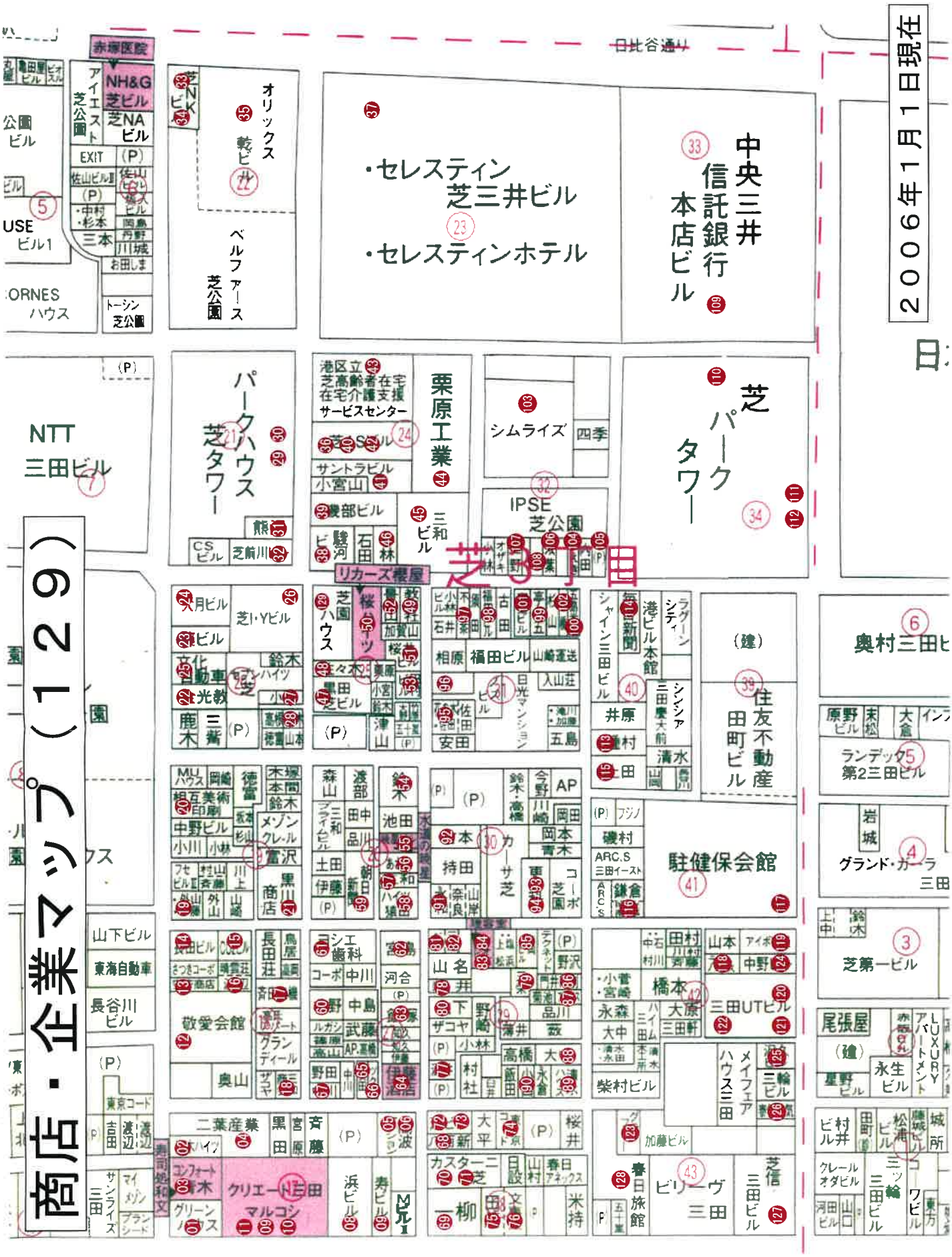
# 北四国町の商店・企業一覧

| | 名称 | 地図上の表示 | 番地 | 掲載状況 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | あきやま歯科医院 | グリーンハウス | 17の1 | |
| 2 | 三田木村屋 | 青木ハイツ | 17の2 | ○ |
| 3 | 寿司処　和文 | コンフォート青木 | 17の2 | ○ |
| 4 | 二葉産業㈱ | 二葉産業 | 17の4 | ○ |
| 5 | ㈱ｼﾝﾏﾙｴﾝﾀｰﾌﾟﾗｲｾﾞｽ | 高波マンション | 17の10 | |
| 6 | ㈱クラッチワーク | 高波マンション | 17の10 | |
| 7 | ㈲寿米菓本舗 | 寿ビル | 17の13 | ○ |
| 8 | 浜野無線㈱ | 浜ビル | 17の14 | ○ |
| 9 | ㈲山本サイクル商会 | クリエート三田マルコシ | 17の15 | |
| 10 | ㈲マルコシランドリー | クリエート三田マルコシ | 17の15 | |
| 11 | ㈲赤羽食堂（梅寿司） | クリエート三田マルコシ | 17の15 | |
| 12 | 宗教法人心○界教団 | 敬愛会館 | 18の2 | ○ |
| 13 | 安斉商店 | 安斉商店 | 18の3 | |
| 14 | ㈱長田商店 | 長田ビル | 18の5 | ○ |
| 15 | ㈱新港電気 | CO2ビル | 18の5 | |
| 16 | 渡邉製作所 | 渡辺 | 18の6 | |
| 17 | 斎田工機㈱ | 斎田工機 | 18の9 | |
| 18 | 三和商会 | 三和商会 | 18の11 | |
| 19 | ㈲伊藤製本所 | 伊藤・外山 | 19の1 | |
| 20 | 相互美術印刷 | 相互美術印刷 | 19の3 | 移転 |
| 21 | ㈱黒川商店 | 黒川商店 | 19の9 | ○ |
| 22 | 金光教御田教会 | 金光教 | 20の2 | ○ |
| 23 | 株式会社　東越 | 藤ビル | 20の3 | |
| 24 | レストランし～ずん | 大月ビル | 20の4 | |
| 25 | 文化自動車工業㈱ | 文化自動車 | 20の5 | |
| 26 | 文化産業信用組合 | 芝I・Yビル | 20の5 | |
| 27 | 個人小池タクシー営業所 | 小池 | 20の8 | |
| 28 | 鈴木製作所 | 鈴木 | 20の9 | |
| 29 | ㈱竹中工務店（現地事務所） | パークハウス芝タワー | 21の7 | |
| 30 | 三菱地所㈱（現地事務所） | パークハウス芝タワー | 21の7 | |
| 31 | ヤクルト芝センター | 熊沢 | 21の13 | |
| 32 | 前川製作所 | 芝前川ビル | 21の14 | |
| 33 | 越前谷酒店 | 芝NKビル | 22の7 | |
| 34 | ㈱トレンドアイ | 芝NKビル | 22の7 | |
| 35 | オリックス㈱ | オリックス乾ビル | 22の8 | |
| 36 | ㈱国際観光会館 | 芝ASビル | 23の1 | |
| 37 | 三井不動産㈱ | セレスティン芝三井ビル | 23の1 | |
| 38 | ㈲コス・インターナショナル | 駿河ビル | 24の1 | |
| 39 | 磯部塗装㈱ | 磯部ビル | 24の2 | |
| 40 | ㈲栄金属 | 芝ASビル | 24の3 | |
| 41 | ㈱エス・ドゥーイング | サントラビル | 24の3 | |
| 42 | 新日本工業㈱ | 芝ASビル | 24の3 | |
| 43 | 芝地域包括支援センター | 芝地域包括支援センター | 24の5 | ○ |
| 44 | 栗原工業㈱ | 栗原工業 | 24の7 | |
| 45 | ニチメンマシナリー㈱ | 三和ビル | 24の21 | |
| 46 | 小林ローソク | 小林 | 24の22 | |
| 47 | 黒田運送㈲ | 黒田芝ビル | 25の2 | |
| 48 | ㈲佐々木工業 | 佐々木 | 25の3 | |
| 49 | ㈲音楽教育社 | 教育社 | 25の6 | |
| 50 | ㈱櫻屋 | 桜井ハイツ | 25の6 | ○ |
| 51 | 八光産業㈱ | 桜井ビル | 25の6 | |
| 52 | ㈲景山商事 | 影山 | 25の6 | |
| 53 | ㈱コピーセンター真 | 田村ビル | 25の8 | |
| 54 | ドライクリーニングまるはち | 鈴木 | 26の6 | ○ |
| 55 | ㈱暁星 | 暁星ビル | 26の8 | |
| 56 | ㈲あさひ薬品 | あさひ | 26の9 | ○ |
| 57 | 三和建機㈱ | 三和 | 26の9 | |
| 58 | てんぷら屋猿田 | ハイツ猿田 | 26の10 | ○ 閉店 |
| 59 | 朝日新聞ﾆｭｰｽｽﾃｰｼｮﾝ | 朝日新聞 | 26の11 | ○ |
| 60 | 北野製作所 | 北野 | 27の3 | |
| 61 | ヨシエ歯科医院 | ヨシエ歯科 | 27の5 | |
| 62 | ㈲宮嶋畳店 | 宮島 | 27の8 | ○ |
| 63 | 飯塚剣道具店 | 飯塚 | 27の9 | |
| 64 | 伊藤酒店 | 伊藤酒店 | 27の11 | ○ |
| 65 | 安田精米店 | 安田 | 27の13 | ○ |
| 66 | ツクシ美容室 | ツクシ | 27の13 | |
| 67 | 中川理髪店 | 中川 | 27の14 | ○ 閉店 |

| | 名称 | 地図上の表示 | 番地 | 掲載状況 |
|---|---|---|---|---|
| 68 | ㈱八百新 | 八百新 | 28の2 | ○ |
| 69 | ㈲三田一柳商店 | 一柳 | 28の2 | |
| 70 | ㈱万丈ヴィスプーン | カスターニ芝 | 28の2 | ○ |
| 71 | 栗原歯科医院 | カスターニ芝 | 28の2 | |
| 72 | CRAFT・K | 芝ビル | 28の3 | ○ |
| 73 | ㈲シマ・グラフィック | 芝ビル | 28の3 | |
| 74 | ㈱東京コード | 東京コード | 28の4 | ○ |
| 75 | (資)田中政商店 | 田崎 | 28の11 | 移転 |
| 76 | (株)文事堂 | 文事堂 | 28の11 | ○ 移転 |
| 77 | 酒井商店/㈲SRH | 酒井 | 29の1 | ○ |
| 78 | アライ洋服店 | 新井 | 29の3 | |
| 79 | ㈱三栄社 | 三栄 | 29の3 | |
| 80 | 山下商店 | 山下 | 29の3 | |
| 81 | ローズハウス | ベル | 29の5 | |
| 82 | とんかつ三太 | 三太 | 29の5 | |
| 83 | テスク㈱ | アオバビル | 29の6 | |
| 84 | アオバ理容室 | アオバビル | 29の6 | |
| 85 | カフェ・ド・ゴールド | 森岡ビル | 29の7 | ○ |
| 86 | 門井印刷 | 門井印刷 | 29の9 | |
| 87 | ㈱アイリス・A | アイリス | 29の9 | |
| 88 | ㈱リニアオータニ | 大中 | 29の10 | |
| 89 | 清水ハウス | 清水ハウス | 29の11 | |
| 90 | ミナト風布 | 小西 | 29の12 | |
| 91 | 永和工業㈱ | 永和 | 30の1 | |
| 92 | タカトミ通商㈱ | 竹本 | 30の2 | |
| 93 | 更科　三田店 | 更科 | 30の11 | |
| 94 | 東京総合エンジニアリング㈱ | 更科 | 30の11 | |
| 95 | 花の木美容室 | 花の木・佐田 | 31の2 | |
| 96 | ㈲木原工務店 | | 31の2 | |
| 97 | 不二茶・㈱ラメール | 不二茶 | 31の4 | |
| 98 | ㈲福田工務店 | 福田ビル | 31の5 | ○ |
| 99 | 亭久五 | 亭久五 | 31の6 | ○ |
| 100 | ㈲五島精米店 | 五島米店 | 31の6 | |
| 101 | シエナ | 寅里ビル | 31の6 | |
| 102 | アイケイ社 | 古橋 | 31の6 | |
| 103 | シムライズ㈱ | シムライズ | 32の3 | |
| 104 | うえき商店 | うえき | 32の12 | |
| 105 | たばこ　うちだ | 内田 | 32の12 | |
| 106 | とんかつ双葉 | 双葉 | 32の13 | |
| 107 | ヘアーサロンイトー | 上野 | 32の14 | |
| 108 | ビストロ　LA　CVISINE | | 32の13 | |
| 109 | 中央三井信託銀行 | 中央三井神託銀行本店ビル | 33の1 | |
| 110 | ローソン芝三丁目店 | 芝パークタワー | 34の1 | |
| 111 | うどん　小石川 | 芝パークタワー | 34の2 | |
| 112 | 芝パークタワーデンタルクリニック | 芝パークタワー | 34の2 | |
| 113 | 三田木型製作所 | 種村 | 40の1 | |
| 114 | 毎日新聞三田販売所 | 毎日新聞 | 40の5 | |
| 115 | 土田製作所 | 土田 | 40の12 | |
| 116 | ㈱明光商事 | 鎌倉・明光商事 | 41の1 | |
| 117 | ㈲ハイブリッジ(卯多璃) | 駐健保会館 | 41の8 | |
| 118 | 楽喜亭 | ラッキーハウス | 42の8 | |
| 119 | 石田精機㈱ | アイボリー芝 | 42の9 | |
| 120 | 内海商事㈱ | 三田UTビル | 42の10 | |
| 121 | ホルモン館 | 三田UTビル | 42の10 | |
| 122 | 宝来軒 | 三田UTビル | 42の10 | ○ 移転 |
| 123 | データグラフィー | グラフィー | 43の4 | |
| 124 | 中野建設㈱ | 中野ビル | 42の9 | |
| 125 | 澤久工業㈱ | 沢久ビル | 43の11 | |
| 126 | 奉信電気㈱ | 奉信電気 | 43の13 | ○ |
| 127 | 芝信用金庫三田支店 | 芝信三田ビル | 43の15 | |
| 128 | ㈲春日旅館 | 春日旅館 | 43の18 | |
| 129 | ㈱敬相 | 芝園ハウス | 25の5 | |

# 商店・企業マップ（129）

2006年1月1日現在



# 終の住処を守る会

『終の住処を守る会』は、突然の「北四国町東地区再開発」という出来事に端を発し、発足以来35回の勉強会・12回の特別講座（出前講座利用含む）・３回の健康講座（健康で美しい老い方）・親睦会（新年・忘年）を実施／港区街づくりマスタープラン検討委員会・後期３年港区基本計画見直しの為のタウンフォーラム・芝地区総合支所芝会議・基本計画区民参画会議への積極的参加と提言／東京ランポ・全国区画整理再開発連絡協議会・建設政策研究所・SHIPS等のＮＰＯ、景観市民ネットワーク等市民グループ・各種まちづくり団体との連携参加を精力的に勧め、会の提唱により芝浦工業大学・埼玉大学の学生達による地域防災マップづくりや芝浦工業大学の協力による地域歴史冊子の完成を実現した。住民達が目指すまちづくりへの取り組みとして関東学院大学や、慶応義塾大学の学生達と共に大型再開発に頼らないまちづくりを模索してきた。今後も、北四国町に於ける住民主体の「まちづくり」に向けて下記のスローガンの下、色々な施策を打ち出し活動してゆく。

《スローガン》
・先人が築いた長き歴史ある町、芝三丁目北四国町を愛する人達の親睦の会
・此処に住む人達の生活・生きる権利・安全を守り育てる会
・お互いに信頼し、笑顔で挨拶する楽しい"まちづくり"を考える会

（目的）
第３条（１）国・自治体の開発政策のもと、一方的で住民犠牲の区画整理・再開発事業により住み続ける事が困難になるような生活環境の激変・生業の破壊・住民、商業者の追い出し等が起こる住民無視・住民犠牲の事業に反対する。
（２）住民一人ひとりが主権者として結束し、暮らしと権利・生業の確保・住民主権のまちづくりを追求する為に住民運動を進める。
（３）住民によるまちづくりを推進する為に学習研究を深め、各地の運動団体との交流連帯を行い、住民の願いを実現する為の活動を行う。

（活動の種類）
第４条　この会は前条の目的を達成する為に以下の活動を行う。
（１）まちづくりの推進を図る活動
（２）環境の保全を図る活動
（３）社会教育の推進を図る活動
（４）人権の擁護を図る活動
（５）当会の目的に賛同する団体との交流・助言・援助及び連帯活動

（活動の内容）
第５条　当会は第３条の目的を達成する為、次の活動を行う。
（１）前条に挙げる諸活動実現の為、基礎的な知識の啓発・学習及び各団体との交流、連帯
（２）勉強会・交流会・研究集会
（３）会報の発行
（４）その他、前条に挙げる諸活動実現の為の活動

平成19年7月22日現在　役員構成（会員総数1043名）

１．代表世話人　①野崎秀夫　②村山勝美　③酒井冨美子
２．副代表世話人　①大野雅朗　②野本盛一　③大原令子　④福田　勇　⑤須田則男　⑥坂本次男　⑦青木美代子
３．事務局長・会計　野本盛一（兼務）
４．相談役　中川敏雄
５．監査役　①中川寿文　②今野三雄
６．世話人　１２名
７．賛助企業　１６社
８．賛助団体　２団体

# 活動内容

◆月1回の定例勉強会◆

◆港区出前講座◆（左：防災　右：介護保険）

◆ワークショップなどのイベント◆

◆特別講座（消防署の救急救護）

◆港区まちづくり講座

# ０７：終わりに

平成14年に「北四国町会西地区まちづくり推進協議会」が結成され、住民達に充分な理解を求めないまま超高層ビル化に向けて、「再開発」への動きが起こりました。そんな中で彼等と住民全体での対話を求め、「終の住処を守る会」は創られました。再開発の実態が明らかに成るにつれ、維持が難しくなった協議会は、平成16年、対話に答えないまま解散しました。ですが、私達「終の住処を守る会」は時代と共に変わり行く町の姿に何を求め、どう在りたいのかを考え、対処して行けるようにと活動を存続し、住民の求める身近な“まちづくり”を模索しながら進めています。

町は始めから存在していたのではありません。人が住み着き、コミュニティーが生まれ町という形態になったのです。『住んでいる』という当り前の事がとても大切なことであり、その生活から生まれる交流こそが町なのです。私たちと共に生きている町は時代と共に変化してゆきます。しかし、急激に町を超高層のビルに置き換え、その土地の歴史も消され、今居る住民の大半が住み続けられなくなる再開発は町づくりではありません。外から押し付けられたものではなく、住民自らが内から自然に変化してゆくのが町のあるべき姿ではないでしょうか？今こそ自分が『芝に住んでいる』という意味を、その価値を、見つめる時だと思います。この冊子で歴史に支えられ引き継がれてきた、今生きている北四国町の魅力を感じていただければ幸いです。

「終の住処を守る会」代表世話人

H17～18年度・港区マスタープラン検討委員・芝会議委員　酒井富美子

H16年にこの冊子に取り掛かって３年が過ぎようとしています。この時間の中にも住民の変化がありました。古くからのガソリンタンド「十五商会」がこの地を去り、周辺の土地を含めてビルが建ちました。(41－２)の駐車場だった所にも４階建ワンルームマンションが建ち、峯田印刷の石川さんが体を壊し仕事をやめ、一人で住んでいた知久千代さんも息子さんの所へ行き、11月やはり古くから在った「都」旅館が消え、今はマンションが建ちました。H18年10月宝来軒・11月には文事堂もこの地を去り、H19年５月に中川理髪店が廃業しました。代わりに各種チェーン店・洒落たフランスやイタリア料理店、ネイルサロン等が出来ました。三田通に面した3－28の表側は数件の建物が無くなり、H20年には９階建の商業施設ビルが建ちます。私達の会員も、豆腐屋の古田さん山下さん・品川さん御夫婦・酒井さんが亡くなり、これからも老人の多い北四国の激しい変化は続いてゆくでしょう。此処で生まれ、成長し、生活してきた人々の息吹や歴史さえ、感じられなくなる、だからこそ、今、皆で「我が町」について考え、子供達に伝えてゆく事が大切だと思います。建ち並ぶ高層ビルを抜け北四国町に足を踏み入れると「いいな～、まだこんな所が残っていたんですね！何だかホッとします」と皆さんが言ってくれます。人の温もりが稀薄になりつつあるこの頃、隣近所の繋がりを大切にしながら、これからも「終の住処を守る会」は他の皆さんと連携し、勉強会や住民の為の新しい試みを実践して行き北四国町の未来を模索してゆきます。

是非この冊子が皆様のお役に立てますように・・・・

「終の住処を守る会」事務局長・芝会議委員　野本　盛一

# Special　Thanks

池田

野田

斉藤

芝っ子に携わりはじめて、一年近くが経とうとしています。地域に住む人々と一緒になって大学生活最後の思い出に作った地域冊子『芝っ子』は、北四国町の本当の素顔を僕に見せてくれた気がします。

「地域で学び地域に還す」というまちづくりの原点に触れたような気がしました。

今までただ通りすぎていた場所を「町」と感じ始めました。歩いてメモをしたり写真を撮ってまわっていた私に声を掛けてくださったことが思い起こされます。町の歴史とそれを語り継ごうとしてくれるお年寄り、これから育つ子供達に少しでもその歴史・意志を引き継いでいく為にも大変意義のある冊子作りであったと思います。

わたしは、しばっこの編集に関して、編集関係者の似顔絵などでかかわらせていただきました。地域の歴史をこうしたすぐに手に取れる形で残すということはとても重要なことだと思います。

編集に携わった皆様本当におつかれさまでした。

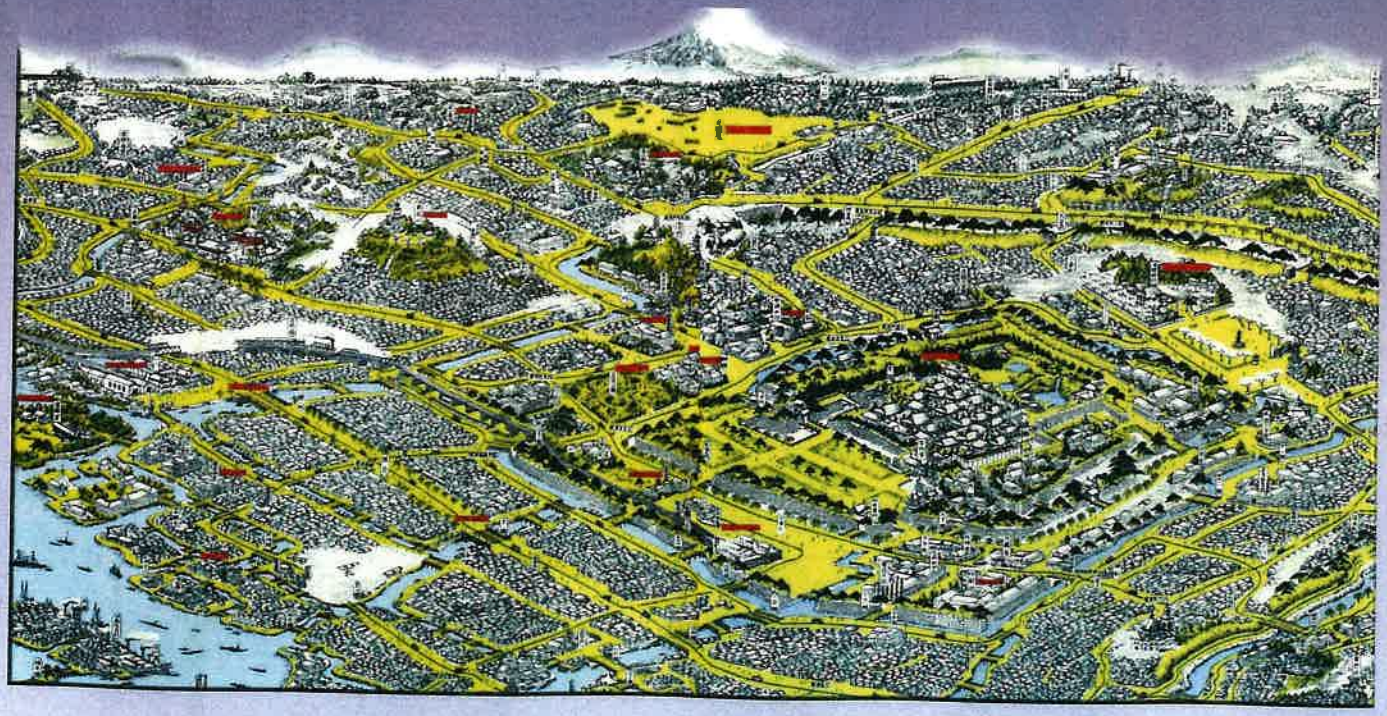
野崎
お菓子たべなさ～ぃ

酒井
はいっ!委員長!!

野本
そりゃまずいよ～

中川
べらんめぇ～

清水一郎（区議会議員）、藤本潔（区議会議員）、三笠季枝（春日神社宮司）、藤田教忠（松葉谷妙法寺前ご住職）、田村妙真（徳聚山圓珠寺ご住職）、管野節子（港区スポーツセンター）、石井正（東京都中央済世会病院）、田中利奈（慶應義塾大学監理局総務部広報担当）、上斗米典子（NEC広報部）、小峰尚三（港区立三田図書館）、榮健・福永睦子（芝小学校）、横山謙吾（赤羽小学校）、小泉守也・大澤恵之助（三田小山町）、河合光臣（芝５）、猿田幸作、小松富美子さん、インタビューや資料提供に快く協力してくださった住民の皆さん、そして多大なるご支援を頂いた野崎氏他会員の方々、そして制作・編集等ご助力して下さった池田さん・野田さん・斉藤さん・佐々木さん及び芝浦工業大学学生プロジェクト関係者の皆様、写真の画像処理を引き受けて下さった（株）グリーンフォト常務取締役市橋利仁さん、最後に印刷製本をして下さったCraft・Kに心より感謝申し上げます。

平成19年港区は区政60周年記念事業として「光のなかの街」（記録映像）『港区 私と町の物語上・下巻』を制作出版。私たち北四国町の皆さんも協力していますので是非、合わせてご覧ください。

# 芝っ子